

体験活動をとおして 青少年の自立を促進する ためのプログラム開発

National Institution For Youth Education



中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立若狭湾青少年自然の家  国立妙高青少年自然の家  国立乗鞍青少年交流の家
 国立能登青少年交流の家  国立立山青少年自然の家



National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

中部・北陸ブロックプロジェクトのルーツは平成19年

以来、10年間、私たちは、その時々テーマに合わせた

体験活動の効果の検証、調査研究、プログラム開発をしてきた

「体験を通じた青少年の自立」

未来を担う青少年たちが自分の足で歩いていくために

青少年とともに 次の10年を見据えて

体験活動をととして青少年の自立を 促進するためのプログラム開発

目次

青少年教育施設へのメッセージ

信州大学理事兼副学長 平野 吉直先生	3
筑波大学人間総合科学研究科 坂本 昭裕先生	4

プロジェクト10年間のあゆみ	5
----------------	---

プログラムのポイント

国立若狭湾青少年自然の家「わかさわん うみはともだち ～幼児の海での体験と指導者養成を連動させて～」	7
国立妙高青少年自然の家「MYOKOチャレンジ2017 ～山を越え、自分を超越る。この夏、とびっきりの13日間～」	11
国立乗鞍青少年交流の家 「自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー」	15
国立能登青少年交流の家「サマーキャンプ」	19
国立立山青少年自然の家「チャレンジ&チェンジ！ 真夏のアドベンチャー2017」	23

研究の成果と課題	27
----------	----

事業を終えて	29
--------	----

プログラム開発の概要	30
------------	----

国立青少年教育施設における実践的研究の役割

信州大学 理事兼副学長 平野 吉直 先生



中部・北陸ブロックにある5つの国立青少年教育施設が連携して調査研究を行う本次長プロジェクトは、平成19年度に始まりました。独立行政法人としての統合のメリットを活かし、それまで5施設が得意としてきた各年齢期に対応した青少年の事業を実施した上で、

現代的課題である青少年の生きる力や意欲の向上について調査研究を進め、その結果をまとめました。

その後、担当者が人事異動等で代わっても、時機にかなった新たな青少年教育の課題を踏まえながら、本プロジェクトは10年にわたって継続されてきました。私は当初、事業計画、研究計画、成果分析、報告書のまとめといった多くの過程に助言者として関わらせていただきました。事業の進め方、調査や分析の方法等について真剣な議論と情報交換が何度も行なわれたことをはっきりと記憶しています。ここ数年は、調査研究に必要なノウハウやおさえるべき観

点が各施設に共有され、以前に比べて助言すべきことが減りました。まさに「継続は力なり」です。これまでの本プロジェクトの蓄積は、全国の青少年教育施設等に対して、大いに参考となる実践的成果として発信されたことに加え、国立施設としての役割の強化につながっているものと高く評価しています。継続を支えてこられた多くの関係者の皆さんに、心から敬意を表します。

青少年教育施設は、研究機関ではありません。青少年の抱える様々な問題を治療・矯正する専門機関でもありません。しかし、青少年教育施設には、家庭や学校にはない特色ある教育機能があります。それは、非日常という空間の中に、自然体験・生活体験・交流体験といった体験活動が総合的に組み込まれていることです。青少年教育施設の提供する体験活動には、青少年の現代的課題の解決を導く大いなる可能性が潜在しています。本プロジェクトのような実践的な調査研究の取組が今後さらに進展し、多くの成果やデータが蓄積され、有意義な体験活動が広く普及することを願っています。



プロジェクト10年をふりかえって

筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生



中国の古典にリーダー論を説いた『貞観政要』というものがあります。その中に「守成は創業より難し」（創業の後をうけて、その成立した事業を固め守ることは簡単なようで、実は難しいことである）という言葉があります。

この言葉の意味は、次長プロジェクトのこの10年間にあてはまるのではないかと思います。当然、10年前のプロジェクトの立ち上げにあっても、様々な難しさがあつたことでしょう。しかし案外、新しくプロジェクトを始めるときには、プロジェクトの新規性もあり、実際に関わる方々の意欲も高いため比較的やり易いことが多いものと思います。むしろ、プロジェクトのマンネリ化を解消し、関わる方々の意欲を持続させることの方が難しいのではないのでしょうか。その意味で、この10年間、プロジェクトの灯を絶やすことなく継続し、かつ成果をあげてこられた裏側には、並々ならぬご苦労があつたことと思います。あらためて、北陸ブロック5施設の関係各位の

皆様方の努力に敬意を表する次第です。

プロジェクトでは、5施設が連携して、時勢に応じた青少年の課題やテーマを設定し、プログラム開発あるいは、その評価に取り組んできました。このようなプロジェクトのおおよその考え方や方向性は、間違っていなかったと思われますし、今後も大きく変える必要はないであろうと考えます。しかしながら、時代とともに青少年のあり方は、変わりますし、私たちも調査研究を通じてプログラムを改善してゆくことが求められるように思います。これまでのあり方に満足することなく、不断の挑戦を続けてゆくことが必要なのかもしれません。

私たちの社会は、科学技術の進展とともに、さらに都市化、効率化、省力化を志向する社会へ向かっているように思われます。したがって、そうであるだけに青少年の体験活動の重要性は、ますます高まると考えられます。このような科学技術の進展と体験活動の必要性は、裏表の関係であると思われるからです。私たちは、確信を持って青少年のための体験活動を推進してゆくべきではないかと思います。



中部・北陸ブロック5施設連携プロジェクト ～10年間のあゆみ～

① 5施設連携プロジェクトが目指すところ

平成18年4月に国立オリンピック記念青少年総合センター、国立青年の家、国立少年自然の家の3法人が統合され国立青少年教育振興機構が発足しました。それまで別々の法人として運営してきましたが、3法人が統合したことにより青少年の全年齢期と青少年教育指導者を対象に横断的な事業を展開することが可能となりました。それを受け統合のメリットを活かした事業として、平成19年度から中部・北陸ブロックの5施設が連携し、その時々の青少年の課題やテーマを設定し調査研究事業、プログラム開発事業を推進してきました。

本プロジェクトは、青少年教育のナショナルセンターとして、全国の青少年教育施設の教育機能の向上を目指し、先導的な調査研究や効果的な体験プログラムを開発します。また、研究対象事業における量的・質的研究など実践的な研究を行い、成果やデータを広く普及することを目的にプロジェクトを推進しています。

〈目的〉

- 本プロジェクトは、全国の青少年教育施設の教育機能の推進を目指しています。
- ① 青少年の全年齢期を対象にした調査研究・プログラム開発の推進
 - ② 研究対象事業における量的・質的研究による実践的な研究
 - ③ 国立施設における実践的研究による成果やデータの蓄積、公立施設への普及
 - ④ 担当職員のスキルアップと他の職員への波及効果

② 研究体制

本プロジェクトの研究体制は、統合のメリットを活かしながら、平成19年度から21年度にかけてのプロジェクト当初は、図1のような体制で連携してきました。少年自然の家は幼児から小学生を対象とし、交流の家は中学生以上を対象としてきました。ただし近年は、すべての施設で幼児から青年までを対象とした教育事業を実施しており、研究テーマにあわせた年齢期を対象としています。検証方法については、量的・質的指標の中から、対象者・事業内容においてより適した指標を選定しました。その際の指導・助言については、信州大学 平野 吉直先生、筑波大学 坂本 昭裕先生にご指導頂きました。

ここで得られた成果については調査研究報告書を作成し、全国の青少年教育施設をはじめ社会教育担当課等に発信・普及を図っています。

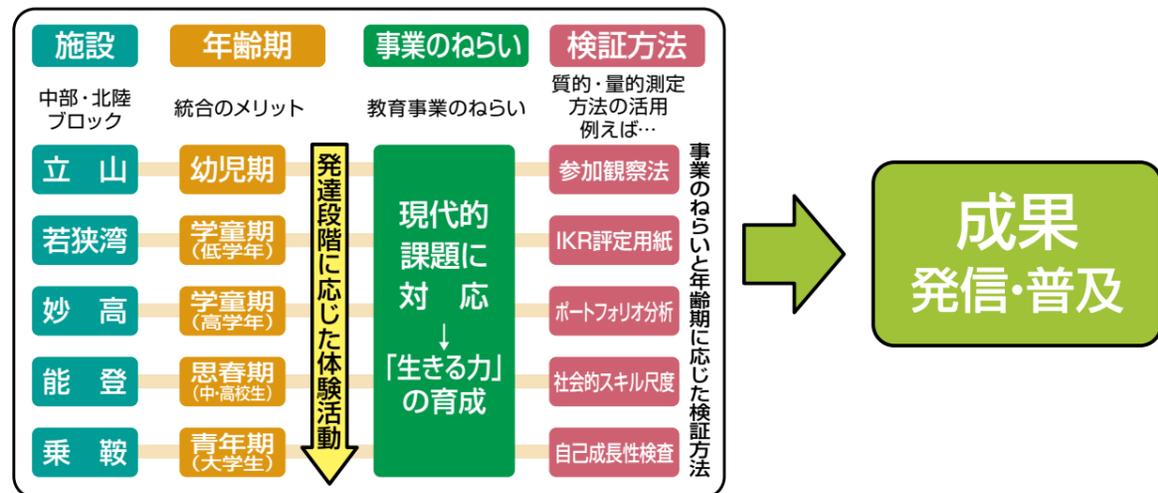


図1 プロジェクト当初の研究体制

③ 研究テーマの変遷

第1期 平成19年度～21年度

- テーマ：体験活動が青少年の意欲向上に与える影響に関する調査研究
～各年齢期における体験活動のあり方について～
- 背景：生きる力（平成20.1中央教育審議会答申）
：コミュニケーション能力・規範意識の育成（H20.12青少年育成施策大綱）
：意欲を持ってない青少年の増加など
- 成果：発達段階に応じた体験活動のねらいと展開
：発達段階に応じた「生きる力」を育む体験活動のあり方

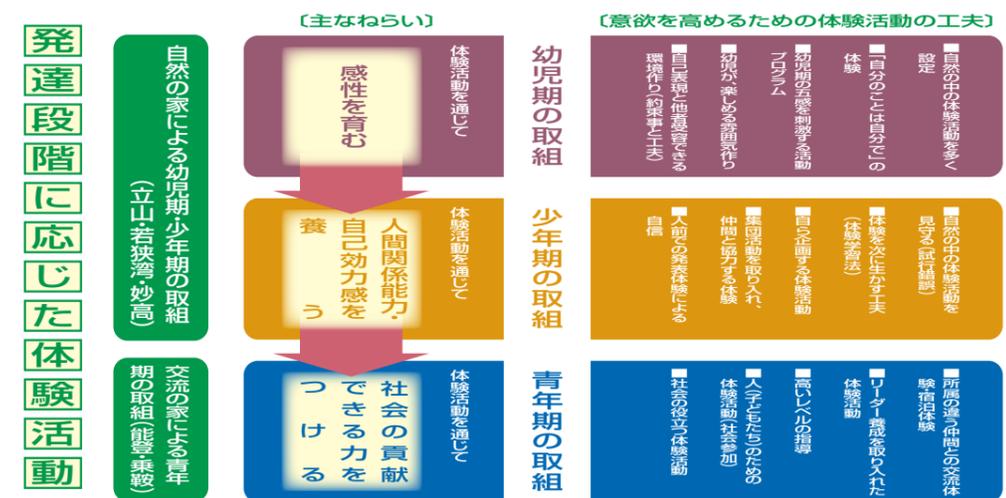


図2 発達段階に応じた体験活動のあり方

第2期 平成22年度～26年度

- テーマ：課題を抱える青少年を対象とした体験活動のプログラム開発と展開
～国立青少年教育施設中部・北陸ブロック5施設の挑戦～
- 背景：不登校、引きこもり、発達障害等課題を抱えた青少年の増加
：子供の貧困対策（H26.8子供の貧困対策に関する大綱について閣議決定）
- 成果：自己肯定感や意欲の向上
：チャレンジ精神や実行力の育成

第3期 平成27年度～29年度

- テーマ：体験活動をととして青少年の自立を促進するためのプログラム開発
- 背景：機構の統一テーマ「体験活動を通じた青少年の自立」
- 成果：自立のためのプログラムデザイン
指導のあり方・スタッフ研修のあり方



図3 青少年の自立を促進するためのポイント

わかさわん うみはともだち

～幼児の海での体験と指導者養成を連動させて～

1 事業の概要・目的

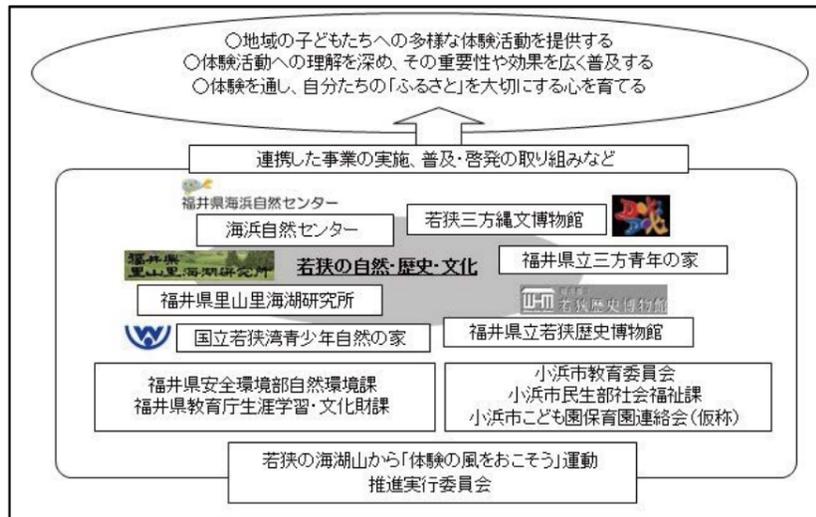
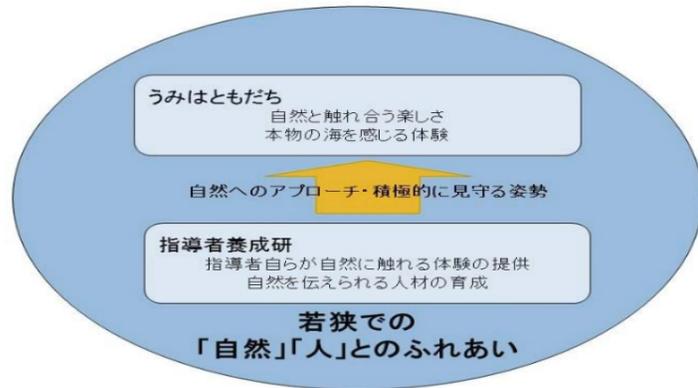
(1) 事業の概要

平成27年度より、福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織した。その事業として、小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児(年長児)対象の「わかさわん うみはともだち」を3年間実施した。

「幼児の自然体験活動指導者養成研修」は、シーカヤックや野外炊飯、スノーケリングなどを通して、幼児教育に携わる者自身が実際に自ら様々な体験することで、自然や体験活動に対する理解を深めることをねらいとして実施した。

「わかさわん うみはともだち」では、砂浜遊びやハイキングを通して、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせることをねらいとし、海編、山編と分け、実施時期を8月と10月に分け、より季節を感じることでできる日程とした。

8月中旬に「幼児の自然体験活動指導者養成研修」、8月下旬に「わかさわん うみはともだち」海編を行った。昨年度よりも活動の時間や場所などの制約の減らし、より自由に充実した活動ができる様に工夫をした。10月下旬に計画していた山編は、残念ながら台風21号の影響で取り付け道路が土砂崩れとなり開催ができなかった。



(2) 事業の目的

- ① 幼児の自然体験活動指導者養成研修
 - ・低年齢期からの体験活動の重要性が指摘されている今日、幼児教育に携わる者自身が実際に自ら様々な体験をすることを通して、自然や体験活動に対する理解を深める。
 - ・若狭湾の海や山での自然体験を通して、自然を知り、自然に興味を持ち、自然について伝えられるような自然体験活動の指導者になるためのきっかけを提供する。
- ② わかさわん うみはともだち～海編・山編～ 対象は5歳児(年長)
 - ・自然体験を通して、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせる。
 - ・若狭湾の海で遊ぶことで、より海を身近なものと感じられるようにする。
 - ・普段の保育に、海や自然とのふれあいをより取り入れるきっかけとなるようにする。

2 活動内容

幼児の自然体験活動指導者養成研修 平成29年8月17日(木)～8月18日(金)

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
8月17日(木)	受付	オリエンテーション 開講式	シーカヤック の技術	「自然体験活動」 の技術	シーカヤックで 無人浜へ	昼食 弁当当休	無人浜へ	シーカヤックで 無人浜へ	スノーケリング の技術	「自然体験活動」 の技術	テント設置と野営 (無人浜)	「自然体験活動」 の技術	「自然体験に ついて考える」	「無人浜で 自然体験に ついて考える」		就寝
8月18日(金)	起床・朝食	シーカヤックで 自然の家へ	スノーケリング	「自然体験活動」 スノーケリング	昼食 弁当当休	昼食 弁当当休	閉講式 事業のまとめ	解散								

○わかさわん うみはともだち～海編～ (※は食堂食の利用の園)
平成29年8月25日(金) 76名(※チュールリップ、※今富そらのとり、中名田、加斗)
8月29日(火) 95名(※宮川、※口名田、※やまなみ、※聖ルカ、)
8月30日(水) 92名(浜っ子、内外海、松永、国富、遠敷)

各回同日程	9:00	10:30	12:50	14:00	14:30
各回同日程	園出発	自然の家着 はじめの会	磯遊び 砂浜遊び	昼食 【食堂食】	休憩 自然の家発 おわりの会 (各園へ)
各回同日程	園出発	自然の家着 はじめの会	磯遊び 砂浜遊び	昼食 【持参弁当】	磯遊び 砂浜遊び 自然の家発 おわりの会 (各園へ)

○わかさわん うみはともだち～山編～ (台風21号で発生した大規模な土砂崩れのため中止)
平成29年10月25日(水) 94名(やまなみ、今富、国富、加斗)
10月26日(木) 26名(遠敷、中名田、宮川、口名田)
10月27日(金) 94名(浜っ子、内外海、チュールリップ、松永)
10月30日(月) 58名(聖ルカ)

各回同日程	8:30	10:00	12:00	13:00	14:30
各回同日程	園出発	自然の家着 はじめの会	山の活動 昼食【持参弁当】 山の活動		自然の家発 おわりの会 (各園へ)

※荒天時はレクリエーションやクラフトを実施

3 自立を促すための手立て

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修

◎指導者に自然を体験してもらい、子どもたちへの支援につなげる◎

当施設の元事業課長であり、「新しい公共」型の管理運営に向けた運営協議会委員で、小浜市内の子ども園園長をされている大森和良氏とシーカヤック冒険家であるグランストリーム代表の大瀬志郎氏を招き、「シーカヤック」と「スノーケリング」の活動を中心に据え、参加者自身の自然体験活動への理解を深めるというねらいのもと参加を募った。シーカヤックではるか対岸に見える無人浜を目指し、海を渡り、キャンプをすることで、日頃体験できない体験活動の中で、雄大な自然を感じとる体験をしようと企画を立案した。今年度は、小浜市の保育園の保育士さんとはもとより、ホーム

ページで募集をしたこともあり、県外の中学校や高等学校の教員の方々などの参加があった。アイスブレイクで参加者同士が打ち解けあった後、浜でシーカヤックの講習を行った。シーカヤック体験が初めての方が多くて、とまどいながら講習を受けている方が多かったが、次第にコツをつかみ無人浜へ向けてシーカヤックツーリングを開始した。ツーリングは2時間程度の長い時間になった。当日は若干波もあり、大海原に出て不安を持たれた方や船酔いされた方もあったが、どのペアも最後まで協力しながら活動を進めることが出来ていた。

野外炊飯では、最初薪に火がつかなくて困っていた班があったが、どうすると火がつきやすくなるかを話し合いながら火をつけていた。また、班ごとに自主的に分担を決め、手際よく調理を進めることもできていた。食後のふりかえりでは、「今日の自然体験で子供のころの気持ちに戻れた気がする。」「今まで出会ったことのない自然に出会えて感動した。」「雄大な海での自然体験をして、日頃の悩んでいたことがあまり大したことではないように思えた。」などの感想が得られ、夜遅くまで大変有意義な時間を過ごすことができた。



(2) わかさわん うみはともだち～海編～

◎本物の海に自由に触れ、「楽しい」を広げていく◎

今年度は、日程を少し早めて8月下旬の3日間で行った。3日間とも雨が降らず水温が高い状態で実施できた。今年度は、新しく園ごとの活動範囲や活動時間の制約を外して、園独自の計画で実施できるようにした。また、園ごとに担当の職員も配置し、より活動内容が広がるように支援することもできた。昼食は、お弁当持参とレストラン利用の選択ができる様にもした。3日間には波が高い日もあり、フローティングジャケットを着た園児たちは、最初は波打ち際で遊んでいたが、次第に波に体をまかせ波に流されて楽しんでいた。また、浜辺からより遠くの底の見えない深い海へ泳いでいく園児も何名もいて驚かされた。また、タイドプールでは、箱メガネで海の中をのぞいたり、様々な海の生き物触れたりして新しい海の発見をした園児も多かった。

このように園児一人一人がそれぞれの思いをもとに海での活動を楽しんでいる姿がみられた。時間もゆったりととれて海に十分浸ることができ、園児と海との距離が縮まったように思えた。

(3) わかさわん うみはともだち～山編～

(台風21号で発生した大規模な土砂崩れの影響のため中止)

◎山体験から自然をより身近に感じさせる◎

海だけでなく、山にも入って自然体験をしようと山編と題して計画した。自然の家から、沖の石を一望できる歌碑まで約50分の道のりのハイキングを計画した。残念ながら台風21号で発生した大規模な土砂崩れの影響で取り付け道路やハイキングコースの安全が確保できなくて、実施ができなかった。

4 評価・考察

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修(参加者の感想から)

- ・たくさんの自然に触れ、この小浜がいかに自然に恵まれているかを園児にも感じて欲しいと思った。
- ・海の中は、どの様になっているのか、何がいるのかを園児に実際に目で見て感じて欲しい。
- ・自然の中で学ぶ楽しさや怖さ、最後まで出来たときに味わえる達成感などを園児には感じて欲しい。

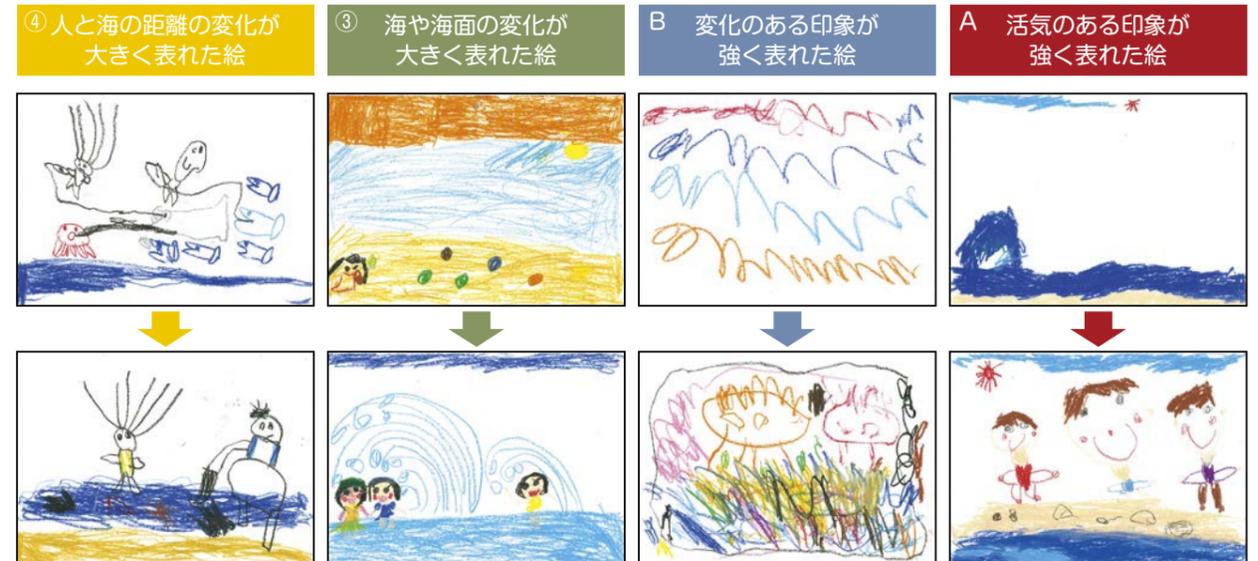
(2) わかさわん うみはともだち～海編～の事前事後の絵画分析から

今年度も参加全園児から海に関する絵画を「わかさわん うみはともだち～海編～」の事前事後に描いてもらい、それらの絵を職員12名で観て、「絵の変化」と「絵の印象」について評価した。

まず「絵の変化」について、次の5つの項目(①生き物や植物等の変化②人の変化③海や海面の変化④人と海の距離の

変化⑤色の変化)で、変化が増えれば+、変化がなければ0、変化が減れば-と評価した。次に「絵の印象」については、次の5つの項目(A活気のある⇔活気のないB単調⇔変化のあるC動的な⇔静的なD力強い⇔弱いE鮮やかな⇔地味な)で、それぞれどちらに近いのかを5段階に評価した。調査結果を見ると「絵の変化」については、+の変化が一番大きかったのが④人と海の距離の変化で、次いで③海や海面の変化が大きく表れた。「絵の印象」については、一番印象の変化が強く表れたのは、B変化のある印象で、次に強く表れたのは、A活気のある印象であった。

以上のことから、園児が海で行った自然体験から今まで知らなかった海のことを詳しく知ることができ、海をより身近な存在としてとらえるようになった。また、海での自然体験が園児の気持ちに変化をもたらし、心を元気にしてくれる効果があったことを絵の調査から読み取ることができた。今後、絵の分析については、専門家の意見も聞きながら、さらに詳しく調査していきたい。



(3) わかさわん うみはともだち～海編～ 先生方の事後アンケートの結果から

- ・海で見たこと、体験したことを自分の言葉で意気揚々と年中児に伝えていた。
- ・園に帰るとすぐに満面の笑みで「楽しかった!面白かった!」と話す姿が見られた。
- ・とても楽しい時間を過ごし、子供たちは「また行きたい」と言っていた。
- ・子供たちは、どんな自然も遊びにできるということが分かった。
- ・家庭にも自然体験の良さを知らせ、保護者自身が楽しいと感じる取り組みができるとよい。
- ・解放感の中、自然と一体になる楽しさを味わいまさにうみはともだちという体験ができた。

(4) 次年度へ向けての検討課題

今年度は、今後1月から2月には自然の家の職員が各園に出向き、各園の周辺の自然環境を生かした自然体験活動の実施を予定している。事前に担当が園に出向き、先生方と話し合いを持ち自然体験活動の計画を立て実施しようと考えている。小浜市の保育園、幼稚園との交流は、8月の指導者研に始まり、1・2月まで3～4回の交流を行う。次年度は、園の担当の職員をできるだけ固定して、園児の変容を調べたい。過去3年にわたって行ってきた指導者研修は、参加者の勤務の都合も考慮し、全日程参加にこだわらず、部分的に参加もできるなどという柔軟な対応で持続可能なスタイルを視野に入れる必要がある。

5 成果と課題



「幼児に自然体験を」というシンプルな目標設定を行い、「うみはともだち」以外に様々な事業を企画した。例えば家族を対象とした「若狭湾!海フェスティバル」では5歳児からスノーケリングを実施した。また、幼児期の運動プログラム普及事業では昨年1月に若狭町の2園の保育園と連携して自然の家でのプログラムを展開した。この様に幼児対象の事業を続けていくことで、その体験効果や安全管理についての検証を進めていきたい。

MYOKOチャレンジ2017

～山を越え、自分を越える。
この夏、とびっきりの
13日間～

1 事業の概要・目的

(1) 概要

このキャンプは、子供たちが13日間という長期間をかけ、信越トレイル(全長80km)と火打山・妙高山の縦走を含む合計100kmの踏破を目指す統合型長期移動チャレンジキャンプである。

自然への挑戦を通し、一人一人が違う個性をもつ仲間として、お互いに助け合ったり、自分の力でやり抜いたりして、ゴールを目指す。「登山やキャンプなどに挑戦したい!」「自然体験に興味や関心がある!」「自分に自信をつけたい!」「悩みを解決するきっかけにしたい!」など、様々な思いをもった子供たちの成長を支援するとともに、いじめ・不登校・ADHD 等発達障害・ネット依存など、子供たちを取り巻く今日的課題を支援する事業でもある。

(2) ねらい

このキャンプを通して、子供たちの「社会を生き抜く力」(当キャンプでは、「第2期教育振興基本計画」ならびに「新・機構元気プラン」をベースに「自立」「協働」「感謝」と捉えた。)を育成することをねらいとしているキャンプである。

(3) 日程 【事前キャンプ】1泊2日 【本キャンプ】12泊13日

(4) 参加者 小学校5年生から中学校2年生までの18名(男子12名、女子6名)
(うち軽度発達障害や不登校傾向などの参加者が5名)

(5) スタッフ 妙高青少年自然の家職員4名 学生スタッフ4名
スーパーバイザー兼臨床心理士1名
※この他、物資運搬などのサポートとして自然の家職員が複数名



2 活動内容

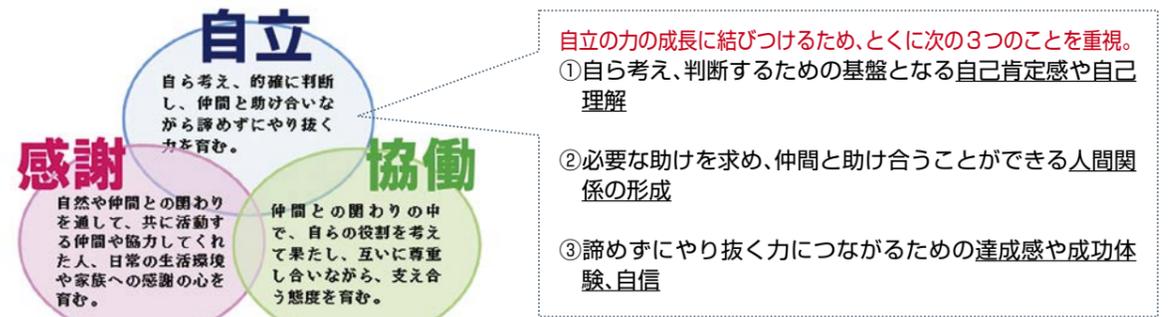
準備のステージ (キャンプ3週間前)	1日目 オリエンテーション トレッキング体験 テント設営体験 保護者面談 参加者面談(希望者) 装備・安全管理説明など	2日目 野外炊事 参加者面談(希望者)		
出合いのステージ	1日目 開会式 全体のルール確認 入浴: 宿泊施設 夕食: 野外炊事 宿泊: 宿泊施設	2日目 信越トレイル(天光山～伏野峠) 入浴: 温泉施設 夕食: 温泉施設 宿泊: テント泊	3日目 信越トレイル(伏野峠～光ヶ原高原キャンプ場) 入浴: シャワー 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	4日目 自由時間 びっくり野外炊事 プラネタリウム グループの目標設定 入浴: 温泉施設 夕食: 温泉施設 宿泊: テント泊
協力のステージ	5日目 信越トレイル(光ヶ原キャンプ場～仏ヶ峰登山口) 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	6日目 信越トレイル(仏ヶ峰登山口～涌井) 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	7日目 千曲川メガサップツアー 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事(料理コンテスト) 宿泊: テント泊	
自立のステージ	8日目 信越トレイル(涌井～赤池) 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	9日目 信越トレイル(赤池～斑尾山山頂) 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	10日目 野尻湖バナナボート体験 登山準備 入浴: 温泉施設 夕食: 野外炊事 宿泊: テント泊	
挑戦のステージ	11日目 火打山登山 入浴: なし 夕食: 宿泊施設 宿泊: 山小屋	12日目 妙高山登山(縦走) 入浴: 自然の家 夕食: ゴールパーティー 宿泊: テント泊	13日目 閉会式 後片づけ 振り返り 保護者面談	



3 自立を促すための手立て

(1) 本事業における「自立」の捉え

本事業では、自立を「自ら考え、的確に判断し、仲間と助け合いながら諦めずにやり抜く力」とした。「自立」とは自分一人の力では獲得することができず、他者や集団との関わり合いの中で育まれていくものであり、「自立」「協働」「感謝」の3つの力は、互いに関係し合いながらそれぞれが育成される(下図参照)。



(2) 活動プログラムの特徴的な手立てとその効果

これまで当施設が行ってきた長期キャンプでは、サイクリングやカヌーなどをステージごとに活動を変えていたが、MYOKOチャレンジでは、「歩く」活動を繰り返して行った。単純な活動だが、グループで歩いていくことで、自立につながる教育的効果を得ることができた。

【活動プログラム】
グループで「トレッキング(歩く)」「登山(歩く)」こと。

【具体的には】

- A 序盤は、トレッキングに必要な知識や技術を伝えるようにした。
- B ステージに沿ってねらいを設定した。スタッフは子供たちへのかかり方を少しずつ減らし、隊列の順番、休憩のタイミング、ペース、進路なども含め、子供たちが主体的に活動できるようにした。
- C 事前(当日や前日)に、地図をもとにして目標時間や危険箇所、休憩場所などグループで確認する時間を設定した。
- D ステージごとに活動を変更せず、歩く活動を繰り返した。

効果

- 自分と仲間が同じ活動を行っているため、達成感を共有することや他者に共感的になる場面が生まれやすかった。
- 運動が単純でゆっくりであるため、活動しながらの言葉や行動を他者が受け止めやすかった。
- ルート確認やペース、休憩、声のかけ方などグループのコミュニケーションを必要とする場面が多々あった。

子供たちの様子

前を見渡せる先頭の子は「足元注意!」「枝に注意!」など、後方に続く仲間へ伝言ゲームのように伝える姿があった。疲れてペースダウンしてしまう仲間や体調の悪そうな仲間がいた時は、後方を歩く子が気にかけて先頭に声をかけて休憩を入れる。皆が疲れているのではないかと感じた時は、自然と「頑張れ!」という声かけがあった。

【ノートの記述より】

- 仲間に支えられ、僕は助けられ、僕も助ける。100kmを踏破できたのは、この繰り返しのおかげだと思えます。
- みんながいなければ目的地までたどり着けなかったと思います。今日の夕食は最高おいしいと思いました。たとえ遅くなくても、みんなで目的地まで歩いたからです。
- 「自分には仲間がいる、一人ではない」という意識を持つことができた。「長い道のりを頑張って歩いたのだから、自分はまだいける!」と自信をもつことができた。



(3) 統合型としての特徴的な手立てとその効果

MYOKOチャレンジには、統合型キャンプとして心理的な課題や軽度の発達障害をもつ子供達も参加する。参加した子供たち全員が、安心して活動プログラムに向かい、お互いに成長し合える環境を作るために大きく次の2つの取組を行った。



① わかりやすいキャンプ生活を目標として構造化を図る。

日常生活での場面での構造化

- A 連絡・指示を見える化する。
- B グループカラーを設定し、グループごとに用具を色分けして管理する。
- C 全体の約束事を参加者と共有する。

活動プログラム中の場面での構造化

- D グループの旗を活用して、振り返りやグループの目標、約束事を視覚化する。
- E 同じ活動(歩く、キャンプ生活)を繰り返す。
- F テーマソングを設定し、参加者の一体感につなげる。
- G グループで何かを決めるときの方法を明確にしておく。

効果

- 参加者が活動に対して見通しを持ったり、自分の歩いた道りを「頑張り」として捉えたりすることができた。
- 体験学習サイクルとして、参加者が初期のステージで学んだことや起きた失敗を次のステージでの成功体験に生かやすく、個人やグループの自信や主体性につながった。

子供たちの様子

【ノートの記述より】

- 予定時間に間に合うように、時間を見ながら歩くということがうまくできなかった。(自分は)人に任せたり、人に言われてから動いたりしていたので、明日はスタート時点から歩くペースを考え、楽しい山登りにしたい。
- 【翌日】ペースを考えるため、昨日とは違う順番で歩いた。自分としてはとてもよかったと思う。AさんとBさんは登りが苦手だったり、Cさんは下りが苦手だったりなど、だんだんと分かるようになってきたので、スムーズに歩けるようにサポートを頑張っていきたい。
- 最初は、登ったり下ったりで大変だったけど、ゴールしたときはうれしくてうれしくてたまらなかった。自分が来た所を見返してみると「ここまで来ることで来たんだ」とびっくりするような、安心するような不思議な感じでした。

② グループの主体的な解決を目指す。

問題や課題が生じたときのスタッフの姿勢

- ① はじめから個人の症状や課題に焦点を当てて改善するのではなく、活動場面で起きた出来事の中で、個人やグループに対応しながら活動を支える。
- ② グループの主体的な解決の過程を見守り手助けし、すぐ介入しない。

振り返りの場面でのスタッフの姿勢

- ① グループの課題やステージのねらいに沿ったテーマをスタッフが与える「教育的な振り返り」を行い、子供たちがグループや自分を見つめられる時間をつくる。
- ② 参加者が自由に出来事を話し合ったり、そのとき思ったことを伝え合ったりする「カウンセリング的な振り返り(日記含む)」を行い、受容・共感的な態度で受け止める。

効果

- 自分のよさを発見や再認識したり、自分の課題を見つめたりするきっかけとなった。
- 一人一人が、グループの中で安心して活動したり、発言したりする雰囲気をつくることができた。

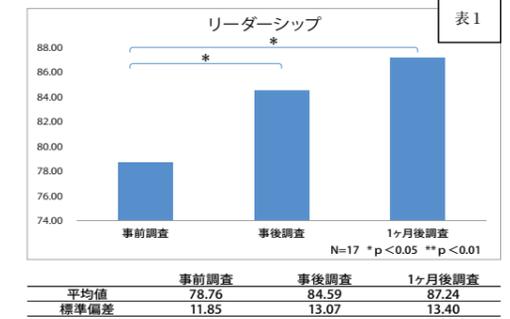
子供たちの様子

- 事前にグループで決めた場所へ時間通りにたどり着かない時、グループ内でケンカが起こった。
- Aさんは「時間通りに着かないから、決めた休憩地点より手前で休憩しよう」と言うが、他の仲間たちは「休憩地点まで何としても歩こう」と言う。Aさんは、自分の意見を曲げることが苦手で納得しないまま、その休憩地点まで行くが「なんで私の話を聞いてくれないのか」と仲間に感情をぶつけた。
- 【Aさんの記述より】
私が正しいと思う意見をみんなが聞かず反対され、もめ合いになりました。「何で私の意見を聞いてくれないの」と悲しくなりました。これからはこのようなことがないように、しっかりと直していきたいです。また、少しのことで落ち込んでしまったので、それも直してよい明日を迎えられるようにしたいです。
- 【同グループの特別支援学級に在籍するB男の記述より】
今日は、はじめての地図係だったけれど、ちゃんとできてよかった。けれど、途中で「この班はもう解散だ！」とひどいことを言ってしまった。ごめん。
- 【同グループのC男の記述より】
今日は、あまり協力ができていなくてケンカもあった。自分も疲れが出てきてイライラする。AさんやB男とうまく付き合っていくにはどうしたらいいかわからない。Aさんは意見を反対されたらすぐ落ち込んでしまう。けど、自分も結構冷たく反対してしまっ。明日はもう少し優しく接したいと思った。

4 評価・考察

(1) リーダーシップ測定尺度得点の結果と考察

上位指標	中位指標=リーダーシップ尺度6つの力	下位指標
課題達成機能	困難に自ら立ち向かうとする力	1 意欲・自立性
	計画的に考え行動する力	2 危機意識
	情報を収集し、想像力をもって課題を解決しようとする力	3 計画・判断
	役割を意図し、集団の規範を守る力	4 省察・アクション
集団維持機能	役割を意図し、集団の規範を守る力	5 情報収集
	集団内の人間関係を円滑にしようとする力	6 想像力
		7 役割意識
		8 規範意識
		9 伝達・コミュニケーション能力
		10 エネルギー・明るさ

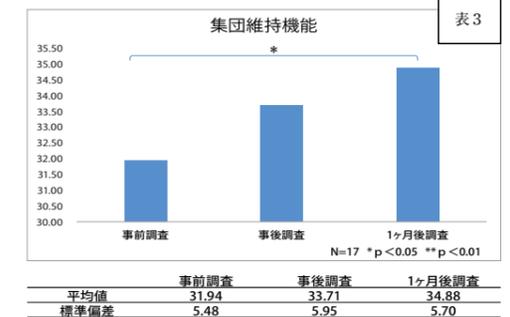
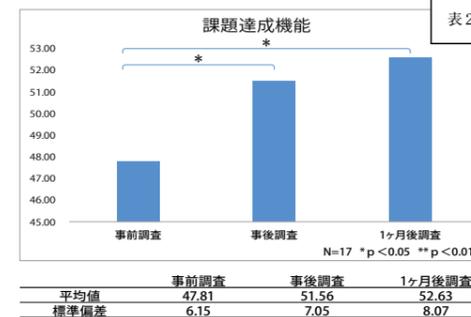


MYOKOチャレンジ2017参加者18名のリーダーシップ測定尺度得点のキャンプにおける変化を明らかにするため、事前キャンプ時(事前調査)、事業終了後(事後調査)、事業終了1か月後(1か月後調査)に質問紙を用いて調査を実施した。外れ値や記述の不備を除いた参加者を分析対象として、1要因3水準の分散分析を行った。

表1は、各調査時期による参加者のリーダーシップ測定尺度得点の平均、標準偏差、分散分析の結果を示したものである。分析の結果、時期の主効果に有意差が認められ(F(2,15)=10.70, p<0.01)、事前調査に比べて事後調査及び1ヶ月後調査の値が有意に高い値を示した(MSe= 29.84, p<0.05)。

リーダーシップ総得点は、事前調査から事後調査にかけて上昇し、その後1か月後調査においても維持されることが明らかとなった。

(2) 上位指標の分析結果



課題達成機能(表2)を分析した結果、時期の主効果に有意差が認められ(F(2,15)=9.58, p<0.01)、リーダーシップ総得点と同じく、事前調査に比べて事後調査及び1か月後調査の値が有意に高い値を示した(MSe= 10.67, p<0.05)。

集団維持機能(表3)を分析した結果、時期の主効果に有意差が認められ(F(2,15)=5.05, p<0.05)、事前調査に比べて1か月後調査の値が有意に高い値を示した(MSe= 10.67, p<0.05)。

(3) 考察

リーダーシップ測定尺度のうち、特に上位指標の「課題達成機能」に効果が見られた。

MYOKOチャレンジの主たる活動プログラムであるトレッキングや登山は、きつさを伴う活動であり、ステージが進むにつれて難易度が上がっていく。各ステージでトレッキングルートをゴールする成功体験の積み重ねと、苦しい道り乗り越えた達成感や自信が、困難に自ら立ち向かうとする力や計画的に考え行動する力に影響したと考えられる。

「集団維持機能」についてはキャンプ直後ではなく1か月後に効果が見られた。

13日間という長期にわたる集団生活の中で、集団維持に必要な力に関しても、子供たち一人一人の中に様々な形で経験が積み重ねられたと推察される。キャンプ後、通常の日常生活に戻り、キャンプで培った経験が学校や家庭など参加者それぞれが生活するフィールドで肯定的に作用したことが、1か月後に効果として表れたものと考えられる。

5 成果と課題

【成果】

- ・ キャンプ前よりもキャンプ実施後にリーダーシップの力が伸びた。
- ・ ステージごとに主活動を変更するのではなく、「歩く」という単純な活動を繰り返すことでも自立につながる教育的効果を得ることができた。
- ・ キャンプの構造化とスタッフの受容共感的なかわり方によって、子供たちが活動プログラムに取り組みやすくなり、個々やグループの主体性につながっていく。
- ・ 起こった問題を「グループの力」で解決していくことが、参加者一人一人の成長を促すこと。その際、グループを支えるスタッフと子供との信頼関係が土台として重要であることが分かってきた。

【課題】

- ・ どういったプログラム構成や手立てが、個々やグループの変容につながったのかをはかる客観的なデータを蓄積し、今後も検証していく必要がある。
- ・ データをもとに有効な手立てやプログラムデザインを整理し、妙高の手法として開発していく。
- ・ 参加者にとって活動の負担が大きかったり、集団に合わせる活動が多かったりすることが、必要以上のストレスになっていないか検証する。
- ・ キャンプ数年後の参加者にとってどのような効果があったのか、データを蓄積していく。



自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー

1 事業の概要・目的

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナーは平成11年度からスタートして19年目となる。本事業は、大学生が自然体験活動の理論や技術を学習し、実際に小学校の自然体験活動プログラムにボランティアとして参加することで子供たちに自然体験活動の楽しさや喜びを伝えることができる青年の育成をねらいとしている。また、所定の単位を取得した参加者には法人ボランティアの資格を与えている。全日程は6日間で実施している。1日目「体験活動の義務と青少年教育施設の役割」は生命の大切さを中心とした講義となっており、安易な気持ちで参加した生徒の気持ちを一気に引き締め、講義「自然体験活動リーダー・ボランティアに求められるもの」とともにボランティアの果たす役割について理解する。2日目は実習中心の内容となっている。セカンドスクールに向けて、実際のプログラムを体験することにより、子供たちの安全性を確保しつつ、自然体験活動を楽しむ術を習得する。特に野外炊事は火や刃など危険性を伴うものを子供に体験させるため、細かな配慮が要求される。その反面、体験活動では大胆さを培うことが目的でもあるので、大学生たちにとってはどのように子供たちをリードしていくか微妙なさじ加減を体得しなければならない。しかし、その大学生自体も体験活動が不足しており、乗鞍の職員は、青少年育成の観点に立ったプログラム構成と参加者の指導に心がけた。マッチを擦ることさえままならない学生もいるため最初の2日間の講義と実習は大変重要である。2日間の講義終了後は、平成10年度から高山市の全小学校において実施している2泊程度の自然体験活動「セカンドスクール」の活動支援ボランティアとして実習を行うことになる。



事業は前年度まで9月、10月と2回実施していたが、今年度から9月1回の実施となった。今年の参加者は、大きく分けて大学の単位の一部として参加する者、教育実習を終えた後の大学生、および法人ボランティアの取得を主たる目的としている大学生からなる。そのため、このセミナーに向かう意識にも学生ごとに大きな差があると思われる。技能の習得はもちろんのこと、セカンドスクールに参加している子供と教員への対応を学ぶ必要がある。教育実習や過去に青少年教育施設での指導経験を踏まえ、子供に自然の楽しさを実感させる願いを抱いて参加している学生も多い。参加者がセカンドスクールで指導実践の場をもつことは、大学生にとって自我を確立させる絶好の機会となっている。特に今回は1・2年生と4年生のアイデンティティの確立度を比較する好機となった。4年生のリーダー性を発揮させる事業となるか検証の機会となった。

2 活動内容

参加者はセミナーや講義に参加 参加者は各学校の活動に参加

秋季自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー 日程表

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
1 日目								受付 12:10~	開 講 式	【講義】 体験活動の意義と 青少年教育施設の 役割(機能)	入 所 OR	夕 食 入 浴	【講義】自然体験活動 リーダー・ボランティアに 求められるもの 【実習】安全対策 と危険回避		翌日 準備		就 寝
2 日目	起 床 朝のつどい 清 朝 食		【講義】 発達段階に 応じた 体験活動の 必要性と 教育課程	【講義・実習】 ・野外炊事の 基礎技術と 指導法 ・安全対策				【講義・演習】 ボランティア活動の心構 えと青少年教育施設 における活動内容 【フィールド調査含む】 (意義・理解)	夕 べ の つ ど い	夕 食 入 浴		【実習】 プログラム企画と 準備		翌日 準備		就 寝	
3 5 日目	起 床 朝のつどい 清 朝 食			開 校 式	セ カ ン ド ス ク ー ル	【実習】 プログラ ム指 導	昼 食	【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	担 任 と の 打 合 せ	夕 べ の つ ど い	【実習】 児童の 生活指導 (夕食・入浴)		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)		【実習】 反省会		就 寝
6 日目	起 床 朝のつどい 清 朝 食		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	開 校 式	セ カ ン ド ス ク ー ル	昼 食		ふ り 返 り	閉 講 式								

3 自立を促すための手立て



(1) セミナーや講義への参加

体験活動の意義や必要性についての知識を学び、安全対策や危機回避についての技術を身につけることになる。また、学校から野外炊事やオリエンティングの指導を任せられることもあるので子供たちにきちんと指導できるように指導方法を繰り返し練習したり、指導で使う資料を準備したりする。その中でこの事業がいかに実践的で大きな責任を伴うものであるかを理解させる。

(2) 各学校の活動(セカンドスクール)への参加

出合いの自己紹介から始まり、活動時間、食事時間、集い、そして、お別れの会まで小学生と一緒に生活することにより、小学生のリーダーとしての自覚を持たせる。

(3) 大学4年生をリーダーとするグループ編成

今年度のボランティアセミナーは1・2年生と4年生を混在させることにより、4年生が1・2年生を指導するようグループ分けを行った。参加大学生は1年生14名、2年生2名、4年生13名の計29名、3つの大学(教育学部)から参加があった。学生は2クラスのα小学校に16名(16班)、1クラスのβ小学校には4名、同じく1クラスのγ小学校には9名の学生を配置した。また、各小学校にはアドバイザーおよび大学生の指導のため、企画指導専門職1名が担当した。

1・2年生と4年生が混在する秋季ボランティアセミナーは今回が初めてである。4年生はすでに1年生の時に秋季ボランティアセミナーを経験している。セカンドスクールでは小学校5年生の体験活動をフォローしなくてはならない。野外炊事や登山など実際に危険を伴う活動の指導をしなければならないプレッシャーを感じている。1年生は今回が初めての体験であり、しかも授業の単位に組み込まれているため無理やりにやらされていると感じている学生や、ただ不安だけを感じている学生もいる。当初ボランティア間には例年以上に一体感が感じられない状況があった。それはこのボラセミを体験している4年生同士でも見て取れた。ボランティア全体のミーティングで4年生の一人が危機感を切々とボランティア全体に訴えかけた。「このまま小学生を受け入れたら、小学生に申し訳



ない結果となる」と。この思いを受けた4年生には何とかしなければならないという気持ちが芽生えたと同時に一体感が生まれていった。そんな4年生の動きを見て1・2年生にもモチベーションの向上が見られた。感想の中には「一時はどうなるかと思ったが役割分担をし、また自分の役割以外のことも行って良かった。そして大きな事故もなく終えることができた」「他大学の人がいて学年も違い、最初は不安が大きかった。ただ、様々なことを相談しながら準備することで様々な視点で見ることができた」「自分の役割を意識し、チームとしてまた個人として成長することができた」などこの事業の中で不安や摩擦が解消され、成長が促され大きな満足が得られた感想が見られた。

4 評価・考察

(1) 参加者対象の調査について

今回参加者にはアイデンティティ尺度(下山1992)を用い事業実施前後の差を比較した。本尺度は日本の大学生の「モラトリアム心理」と「アイデンティティの確立度」との関連を検討するために用いた。「アイデンティティの確立」の項目は自己の主体性や自己への信頼が形成されていることをあらわす項目となっている。「アイデンティティの基礎」尺度はアイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず、不安や孤独におそわれる気持ちを反映した内容となっている。今回はこの事業が大学生の自立に与える影響の年齢による差についても測定することにした。

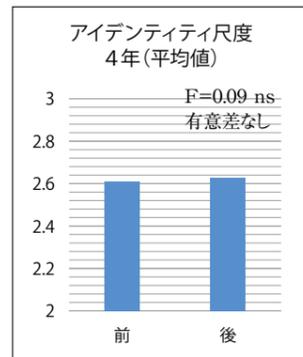
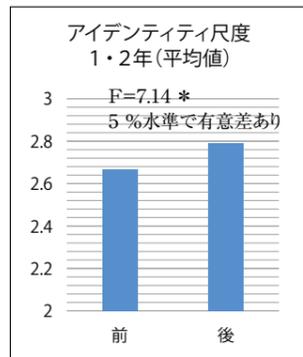
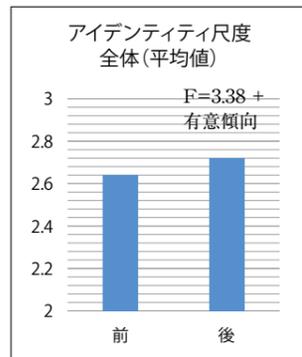
【アイデンティティ尺度】

質問項目(1~10「アイデンティティの確立」11~20「アイデンティティの基礎」11~20は逆転項目)

- | | |
|--------------------------------|---|
| 1 私は興味を持ったことはどんどん実行に移していく方である。 | 11 私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている。 |
| 2 自分の生き方は自分で納得のいくものである。 | 12 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。 |
| 3 私は、十分に自分のことを信頼している。 | 13 異性とのつきあい方がわからない。 |
| 4 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる。 | 14 何かしているより空想に耽(ふけ)っていることが多い。 |
| 5 自分は、何かをつくりあげることのできる人間だと思う。 | 15 私は、人がみているとうまくやれない。 |
| 6 社会の中での自分の生きがいが増えてきた。 | 16 私は、どうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じこもってしまう。 |
| 7 自分にまとまりが出てきた。 | 17 自分一人で初めてのことをするのは不安だ。 |
| 8 私は自分の個性をととても大切にしている。 | 18 まわりの動きについていけず、自分だけとり残されたと感じることがある。 |
| 9 私は自分なりの価値観を持っている。 | 19 私は、人と活発に遊べない。 |
| 10 私は魅力的な人間に成長しつつある。 | 20 自分の中には、常に漠然とした不安がある。 |

(回答は、良くあてはまる：4 / どちらかといえば当てはまる：3 / どちらかといえば当てはまらない：2 / 全くあてはまらない：1 の4件法)

(回答は、良くあてはまる：1 / どちらかといえば当てはまる：2 / どちらかといえば当てはまらない：3 / 全くあてはまらない：4 の4件法)

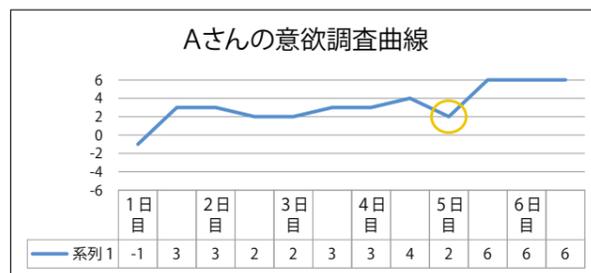


+ p < .10 * p < .05 ** p < .01

事業前後でアンケートを行い、平均点の分散分析を行ったところ、全体では有意傾向がみられ、参加者の学年別には、1・2年生は5%水準で有意差があり、4年生では有意差は見られなかった。分析として、4年生はアイデンティティが確立しつつあるため伸びしろがさほどないことが考えられる。1・2年生は初めて経験するボランティアリーダー養成セミナー中のセカンドスクールで子供たちのリーダーとしての責任を果たすことにより、アイデンティティが向上したと読める。

(2) 参加者の意欲調査曲線と見取り

6日間の参加意欲を「最大値+6」「最低値-6」と設定し、大学生の参加意欲がどのように変化をしていったのかをグラフ上に記録したものを数値化したものである。主観的なものではあるが、ボランティアの心情をよく表している。「意欲調査曲線」は個人で大きな違いがみられた。順調に右肩上がりに意欲の向上が見られたもの、3・4日目に意欲がダウンするもの、最初から最後までテンションの高いもの等さまざまである。特に際立った事例について、担当した専門職の私見を記入した。ボランティアセミナーを通じて、担当した専門職が気づいた大学生の成長の過程を辿るのは興味深い。

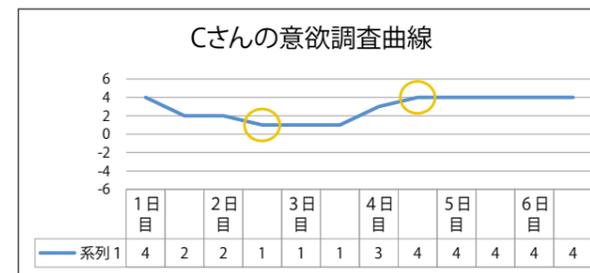


3日目は、担当校の入所が遅かったため、事前に野外炊事の説明の準備やリハーサルを行ったり、出会いの会で話すことを考えたりしていたが、子供たちとの対面を前に、「説明がうまくできないかもしれない」と不安を抱えていた。しかし、4日目になり、実際に子供たちと出会う、出会いの会で楽しく過ごせたことから、やる気も高まってきた。

5日目は、午前中リハーサルを重ねた野外炊事であったが、やはり大変で、本人も「過酷で嫌だった」と感じていた。しかし、野外炊事で子供たちと密に接したことで、子供たちの方から接してくるようになり、夜のキャンドルサービスでは涙する場面もみられるほどだった。6日目最終日には、足元も悪く大変だったにも関わらず、意欲十分で楽しいと感じ、お別れ会では涙が止まらないAさんの姿があった。バスに手を振り続けたAさんは、「やってよかった」と満足した顔で語った。そして、「4年生ってすごい」とかつてセカンドスクールを経験している4年生に憧れを抱きつつ、自分もそうになりたいという意欲ももっていた。最初は強制的に連れてこられたかのように感じていたAさんだったが、「また来たい！」とこの体験が自分の宝物になったようである。



3月に足の手術をし、健康面でも完全な状態ではなかったため、環境の違いも含めて多くの不安を抱えてのスタートとなった。3日目は翌日からの実習に備えた準備や、他の学校の児童が入ってきて不安が高まってきたようである。4日目、午後からは一番不安であるハイキングであったが、何度も転びながらも子供たちと一緒に最後まで歩き続け、帰ってきたときには充実感にあふれた顔になっていた。また、子供たちからたくさん声をかけられ、励まされたことも非常に心に残る経験となった。夜プログラムの星座の話では積極的に班の子供たちと関わっている姿が見られた。5日目は雨の中での野外炊事となった。気温も低く、少し緊張感が高まっている様子がわかる。しかし、無事に野外炊事の説明を終え、野外炊事で班のメンバーとさらに関係が深まり、キャンドルサービスで子供たちの頑張る姿を見て意欲も上がり、充実感が増していった。最終日はネイチャーゲームをしながら、子供たちが自分たちで危険を感じ注意をもらっている様子などを見て成長を感じ取ることができた。お別れ会では、班のメンバーからメッセージカードをもらうなどし、あいさつでは涙が止まらない状態であった。最初は不安ばかりであったようであるが、様々な経験を積み教員を目指す気持ちが今まで以上に明確になったようである。



1年生の時に参加してとても良い経験ができたので、教員になる前にもう一度同じような経験がしたいと考え、再び参加したとのことであった。期待感もあり最初から意欲が非常に高いことが伺える。ただし2日目、3日目は、単位取得のために参加している1年生とのモチベーションの違いから、意欲が低下している。役割分担して1年生に任せた準備が不足していることに対して、4年生としてどこまで介入して良いか迷っていた。責任感が強く、さりげなくサポートできる学生であったため、

専門職として積極的に声をかけるようにアドバイスをした。4日目以降、実際に子供たちと接するプログラムとなり、積極的に子供たちと向き合い良い関係を築いている様子であった。また、担当小学校のボランティアリーダーにも積極的に話しかけ、学生の中ではリーダー的な存在として頼られる場面が多々あった。そのことが意欲の向上をもたらしていると思われる。さらに、毎日プログラム終了時に校長先生からお話をいただけたことも貴重であったようである。5日目、最終日は校長先生から心のこもったお礼や今後教員になった時のための言葉をかけていただき、涙を見せる場面もあった。最終日のお別れ会での挨拶は言葉にならないほど、感動していた。子供たちとも深く関わることができ、それぞれの良いところをたくさん伝えることができたと感じているようである。セミナー後に4月から正式に教員になることが決まったが、Cさん自身も成長することができ、教員になるにあたって非常に良い体験ができたように思われる。



5 成果と課題



- 大学1・2年生と4年生がタッグを組み、セカンドスクールに参加した小学生が最高の満足を得られるよう奮闘する姿は我々職員にとっても大きな刺激になったところである。また、大学生だけで解決できない部分に専門職が要所で関わる点も機能したと思われる。「手を加えずに見ていて下さる所と、助言して下さる所が的確であった」という大学生の感想から、自発的に学ぶ部分が重要であることがわかる。「学校の先生との関わりが欲しかった」という感想もあり、自身が担当する小学生について詳しく知るにより、より良い指導につなげたいという大学生の意識の向上の表れと考えられる。この3年間秋季ボランティアリーダー養成セミナーが大学生の自立を促していることは間違いない。
- 細かな部分の調整を続け、さらにこの事業の満足度が図られるよう改善していきたい。

サマーキャンプ



1 事業の概要・目的

児童養護施設で過ごす子供22名と児童養護施設職員12名を対象に、2泊3日のキャンプを実施した。

児童養護施設では、普段異年齢集団（縦割り班）で寝食を共にしながら生活している。しかし、学校では、同年代で関わる機会が多くなる。中には、同年代の児童・生徒との関わりが苦手だったり、トラブルが起きたりする子供もいる。また、家族と一緒に生活できないことで情緒不安定になり、心の隅を埋めようと反社会的な行動をとってしまう子供もいる。友達との関係づくりでは、「もの」でつながろうとしたり、年齢が上がるほど、過去がフラッシュバックされ、暴力を振るってしまったりする場面もある。このことから、施設職員は「周囲の人とのよりよい関係づくりを築かせたい」「自他のよさを素直に感じられるようになってほしい」という願いをもっている。

本事業では、同年代の子供たちが、普段できないダイナミックな活動に挑戦することで、自己肯定感を高めるとともに、互いに協力し合うことで他を思いやる心やコミュニケーション能力を育てることをねらうとする。

また、交流の家で施設の使い方のルールを守ることをとおして、基本的な生活習慣や公共マナーを身に付け、社会に出るときに役立てることができるようにする。



同年代児童で砂像造りに取り組む

同年代のよりよい人間関係

サマーキャンプでねらう子供の姿

困難なことも最後までやり遂げる

【視点1】
思いやりの心

協力し合う仲間意識

【視点2】
自己肯定感

2 活動内容

<期 日> 平成29年7月22日(土)~24日(月)2泊3日

<参加者> 34名 (内訳)小学生11名・中学生7名・高校生4名 職員12名

<日 程>

1 日 目	<p>◆サイクリング(3コース)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○チャレンジAコース(中学生4名) あすなる学園~交流の家<約38km> ○チャレンジBコース(小中学生2名) 金ヶ崎公民館~交流の家<約19km> ○わかばコース(小学生6名) 千鳥ヶ浜休憩所~交流の家<約10km> <p>*サイクリング不参加者は直接交流の家へ</p>	<p>◆選択プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ○砂像造り(小学生) 柴垣海岸 ○マイスプーン作り(中学生) ふれあいの広場 	<p>◆野外炊飯</p> <ul style="list-style-type: none"> ○カレー作り(同年代グループ) 	<p>◆肝だめし(同年代グループ)</p>	<p>入浴・就寝・MT</p>
2 日 目	<p>起床 清掃 FT 朝食</p> <p>◆館内オリエンテーリング(同年代グループ)</p>	<p>◆プール活動・革細工</p> <ul style="list-style-type: none"> ○プールでの遊び・カヌー体験 ○プールに入らない参加者は革細工体験 <p>◆羽咋道の駅観光</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全員で道の駅観光(マイクロ) 	<p>◆キャンドルセレモニー</p> <ul style="list-style-type: none"> ○施設職員企画で実施 	<p>入浴・就寝・MT</p>	
3 日 目	<p>起床 清掃 FT 朝食</p> <p>◆カッター体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ○参加者全員で1艇 <p>◆振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アンケート記入 <p>◆外食体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分で注文する外食体験 	<p>解散</p> <p>「表中の用語」</p> <ul style="list-style-type: none"> MT…スタッフミーティング FT…フレッシュタイム(朝の集い) 			

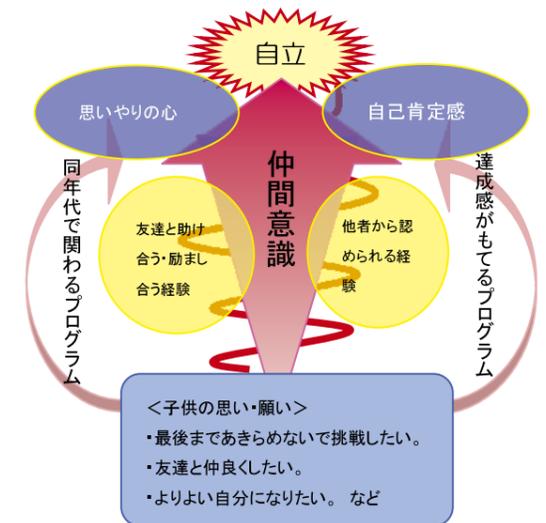
3 自立を促すための手立て

子供は本来、より良い自分になりたいという思いや願いをもっている。その気持ちを顕在化し、普段から周囲に存在している仲間に対し「仲間意識」をもつことが「自立」へとつながると考える。

本事業では、「自立」を「思いやりの心を育成すること」と「自己肯定感を高めること」の2点に絞って考えた。

まず、思いやりの心を育てるためには、友達と関わり合う過程（本事業では同年代の関わりに特化したプログラムを充実させる）において、助け合ったり、励まし合ったりする経験が大切である。

自己肯定感を高めるためには、参加者の実態に応じた困難なプログラムを経験する過程において、自分の頑張りを他者から認められる「自己有用感」をもつ経験が大切である。



(1) 児童養護施設との連携

本事業の教育効果を高めるために、児童養護施設職員との打ち合わせを十分に行い、連携を図ることを大切にしました。事前には、本事業のねらいや参加者の実態等を踏まえ、どのようなプログラムがふさわしいか入念に話し合った。また、サイクリングに慣れるために、事前に自転車を貸し出し、練習する時間を確保した。事業中は、参加者の様子を情報交換するとともに、毎日スタッフミーティングの時間を確保し、一日の振り返りや翌日のプログラムの運営やスタッフの関わり方等を検討した。そのことにより、児童養護施設のねらいに沿った支援に生かすことができた。

(2) 体験プログラムの工夫

主として「思いやりの心を育む」プログラム

【野外炊飯】

同年代の子供で班編成し、友達と協力し合って活動を進めた。班の中で、カレー係・ご飯係・かまど係の役割を決め、それぞれが自分の役割に責任をもってカレー作りに取り組めるようにした。



【館内OL】

同年代のチームで班編成し、班に1枚の写真カードを渡し、顔を付き合わせながら、互いに自分の考えを出し合って課題解決に取り組むようにした。



【砂像造り】

小学生が参加し、3班に分かれて砂像造りに取り組んだ。砂像は、大きいバケツと小さいバケツがあるが、自由に作ってよいことにした。互いに協力し合って一つの造形物を作り上げる過程において、仲間を認め合う姿を期待した。



主として「自己肯定感を高める」プログラム

【サイクリング】

参加者それぞれの体力に応じたコースを設定した。具体的には、チャレンジA(学園から交流の家までの38.5km)、チャレンジB(金ヶ崎公民館から交流の家までの19.3km)、わかば(千鳥ヶ浜休憩所から気多大社までの9.8km)の3コースを設定した。コースには起伏のある道もあり、参加者があきらめずに最後までやり遂げた時の達成感もったり、自分の頑張りを認める自己肯定感もったりできるようにした。



【カッター体験】

キャンプ最後の活動として全員でカッター体験を取り入れた。協力し合い、声を出し合ってカッターを漕ぐ体験をとおして、やり遂げる喜びや、仲間と力を合わせることの大切さを感じるようにした。



【キャンドルセレモニー・振り返り】

参加した子供たちと施設職員が参加し、それぞれの頑張りを全体で認め合う場として、キャンドルセレモニーを位置付けた。施設職員は、「子供の頑張りで嬉しかったこと」、子供たちは、「このキャンプで頑張ったことやこれからの自分で頑張りたいこと」を、自分の言葉で語る時間を大切にしました。他者の思いをじっくりと聴くことを大切にすることで、仲間を思いやる気持ちを出させるとともに、自分の頑張りを認めることで自己肯定感を高めることをねらった。



4 評価・考察

3日間通してキャンプに参加した子供たち20名に、事業前、事業1か月後に「思いやりに関する10項目」と「自己肯定感に関する項目10項目」についてアンケートを取った。(●は逆転項目)

【思いやり尺度】

- 1 友達が困っていたら、相談のってあげますか
- 2 友達が悲しんでいたら、なぐさめてあげますか
- 3 大切なものを無くした友達がいたら、いっしょになって探してあげますか
- 4 ●ちょっとしたことで、友達とけんかになりますか
- 5 使いたい道具などは、友達とゆずり合って使いますか
- 6 友達がけんかしているのを見て、やめさせようと思えますか
- 7 教室がちらかっていたり、ものが落ちていたりしたら、進んで片付けたり拾ったりしますか
- 8 話合いの時、自分と反対の意見でも、最後まで聞くことができますか
- 9 友達がいじめられている時、いじめている人にやめさせようと思えますか
- 10 友達の失敗は許してあげることができますか

【自己肯定感尺度】

- 1 おもしろくないことをする時でも、最後までがんばりますか
- 2 ●何かをする時、うまくできるか不安になりますか
- 3 ●しなければならないことがあっても、後回しにしてしまうほうですか
- 4 ●新しい友達をつくるのは、苦手なほうですか
- 5 ●友達と仲良くすることは、苦手なほうですか
- 6 イライラしないで、すっきりした気持ちで毎日過ごしていますか
- 7 自分から友達に話しかけていくほうですか
- 8 どんな人の前でも、自分の思っていることを言うことができますか
- 9 楽しいと思える日がありますか
- 10 自分の夢や希望がありますか

(評価の仕方) 4…よく思う・よくする 3…たまに思う・たまにする 2…あまりない 1…全くない

上記のアンケート調査をし、1要因被験者内分散分析を行った結果は表1のようになった。「思いやり尺度」については、10項目全体において事業前と事業1か月後で有意差は見られなかった。「自己肯定感尺度」については、10項目全体において事業前と事業1か月後で10%水準で有意傾向であった。また、小学生・中学生・高校生の校種年代別に分け、1要因被験者内分散分析を行った結果、中学生と高校生では有意差は認められなかったが、自己肯定感尺度において小学生で5%水準で有意であった。

表1 事業前・事業1か月後の比較

		事業前		事業1か月後		F
		M	SD	M	SD	
思いやり尺度 10項目	全体	31.10	5.65	31.35	5.09	0.08
	<小学生>	30.10	4.95	30.90	5.39	0.26
	<中学生>	30.00	6.00	30.43	4.95	0.22
	<高校生>	37.00	2.45	35.00	1.63	1.71
自己肯定感尺度 10項目	全体	26.65	4.02	29.10	4.54	3.50 +
	<小学生>	25.80	4.07	30.10	4.11	5.82 *
	<中学生>	27.00	4.11	28.57	5.39	0.38
	<高校生>	28.67	2.49	27.00	2.16	3.57

+p<.10 *p<.05

表2は、「思いやり尺度」「自己肯定感尺度」それぞれ10項目を項目ごとに1要因被験者内分散分析を行った結果、有意差が見られた項目について掲載した。

「思いやり尺度」では、「友達が悲しんでいたらなぐさめてあげますか」「使いたい道具などは友達とゆずり合って使いますか」の項目について、事業前と事業1か月後で5%水準で有意であった。

「自己肯定感尺度」では、「何かをする時、うまくできるか不安になりますか」の項目について、事業前と事業1か月後で10%水準で有意傾向であった。「イライラしないですっきりした気持ちで毎日過ごしていますか」の項目については、事業前と事業1か月後で1%水準で有意であった。

表2 事業前・事業1か月後の比較(項目別)

	事業前		事業1か月後		F
	M	SD	M	SD	
友達が悲しんでいたらなぐさめてあげますか	3.05	0.80	3.45	0.74	5.63 *
使いたい道具などは友達とゆずり合って使いますか	3.55	0.67	3.10	0.94	5.15 *
何かをする時、うまくできるか不安になりますか	1.30	0.56	1.75	0.94	4.06 +
イライラしないですっきりした気持ちで毎日過ごしていますか	2.05	0.92	3.00	0.89	11.85 **

+p<.10 *p<.05 **p<.01

考察

本事業において、事業前と比べ、事業1か月後において、自己肯定感の高まりを伺うことができた。特に、「イライラしないですっきりした気持ちで毎日過ごしていますか」の項目において、1か月後に高い数値を示した。また、「何かをする時、不安になりますか」の項目においても、不安を感じている割合が減少傾向を示した。このことは、サイクリングやカッターのプログラムにより、困難なことへ挑戦し達成感をもったことや、仲間と協力して成し遂げた喜びが自信へとつながり、日常生活に活力をもたらしたことの表れだと考える。

また、同年代における思いやりの心については、小学生同士の関係で成長が見られた。特に「友達が悲しんでいたらなぐさめてあげますか」「使いたい道具は友達とゆずり合って使いますか」の項目において、1か月後に高い数値を示した。このことは、同年代で活動するプログラムを多く取り入れ、スタッフが適切な支援をすることにより、困った時は声をかけたり、友達の存在を認めながら活動したりする姿につながったのだと考えることができる。

【参加者の感想より(一部抜粋)】

<子供たち>

- ・池で船(カッター)を動かして楽しかった。雨にぬれたけど、楽しかった。
- ・海で砂のプリンを作るとき、形を作ったりトンネルをほったりして楽しかった。夜のキャンドルが心に残った。
- ・みんなで協力してカレーを作ったことがとても楽しかった。キャンドルサービスの時、みんなが一言ずつ言ったことがよかった。

<施設職員>

- ・人のミスを責めずに前向きな声かけをする姿があった。
- ・普段あまりかかわりのない子供たちが団結していたことが印象的であった。
- ・食べ物に対して「汚い」「まずい」と言う子が、自分たちで作ったカレーは全部食べ切ろうとする気持ちが伝わってきたし、その子が一番役割を頑張っていた。
- ・笑顔がたくさん見られた。みんなで乗り越えたことが本当によかった。

上記の感想のように、一つ一つのプログラムにねらいをもって取り組んだことが、子供の成長した姿の実感につながると言える。特に、キャンドルセレモニーでは、ろうそくの火を囲み、心を静かに落ち着かせ、一人一人がキャンプの思い出や、自分の頑張りたいことを語り合うことで、温かい空気に包まれることができた。普段は自分の思いを表現しない子供も話すことができ、体験活動が自分の心を開ききっかけになったと言える。

【具体的エピソード】

チャレンジAコースの子供たちは、中学生と高校生(男子3名、女子1名)に2名の職員が付き、計6名で学園から交流の家までの長い距離を走行した。起伏のある道を走行するということもあり、1名の女子生徒は、完走できるか不安そうであった。

職員の二人のうち、一人は女性職員で、女子生徒の後ろを走ることになっていたが、思いの外険しい道に、職員の方が隊列についていくことができなかった。女子生徒に対し、

「○○さん、普通に男子についていっているってすごいわ」

と声をかけると、周囲の男子生徒も会話の中に入ってきて、

「○○さん、職員に勝てるってすごいわ。俺もけっこうきついもん」

と、女子生徒の頑張りを認める声かけが見られ、女子生徒は終始うれしそうな表情を見せていた。

そして途中からは男子生徒が女子生徒の後ろに回り、女子生徒を見守るように走行するようになった。

このように、困難なことを同年代の子供同士がやり遂げる活動をとおして、互いの頑張りを認め合い、励まし合う雰囲気生まれた。



5 成果と課題



○友達と関わり合う過程(同年代の関わりに特化したプログラム)を充実させ、施設職員が適切な支援をしながら事業運営したことにより、子供同士が助け合ったり、励まし合ったりする姿が見られ、仲間を思いやる心が育まれたと考える。

○参加者の実態に応じた困難なプログラムを体験する過程(サイクリングやカッター)を充実させたことにより、自分の頑張りを他者から認められる「自己有用感」をもつ場面が見られ、「自己肯定感」を高めることができたと思える。

○施設職員との事前の打ち合わせを十分に行い、ねらいを明確にして取り組んだこと、事業中も参加者の様子を情報交換しながら進めたことにより、子供たちの自立を促す視点がぶれずに運営することができた。

●本事業で「思いやりの心」を育む視点が、結果としてやや弱かった。思いやりの心を育むためのプログラムや評価の在り方など、さらに検討していく必要がある。

●「思いやり尺度」「自己肯定感尺度」で設定した10項目が、本事業のプログラムでの参加者の変容を見取るのに適切であったか検討する必要がある。

●本事業では、事業前と事業1か月後でアンケートを取ったが、より参加者の変容を詳しく調査するために、事業直後の参加者の意識を調査する必要がある。

チャレンジ&チェンジ!真夏のアドベンチャー2017

1 事業の概要・目的

本事業は、その目的として「さまざまな達成感を味わう中でチャレンジ精神を育み、主体性、自立性、協調性を身に付け、豊かで自立した人格形成の基礎を培う。」を掲げて10年目になる長期移動型のキャンプである。

黒部市石田浜から立山町立山駅までの約50kmの自転車行程と立山駅から立山三山の雄山、大汝山山頂までの約30kmの徒歩行程を8泊9日で行う。その標高差は3,000mである。

今回、この長期キャンプを通して、特に注目した点は、「**自己理解**」「**自主性**」「**協調性**」である。

小学校5年生から6年生、中学校1年生から3年生を対象とし、日本全国から応募がある本事業において、年齢や性別、地域の枠を超えたメンバーが集い、困難な場面を乗り越える過程において体得される「自己理解」「自主性」「協調性」を分析する。

文部科学省の豊かな体験活動推進事業における「体験活動事例集-体験のススメ(平成20年1月)」では、「一の中略- 集団の一員としての自覚や責任を十分認識できず、社会性ある適切な行動を選択できない、些細なことでも感情を制御できずいさかいを起こす子供の増加が懸念されている。」と述べられている。逆にとらえると、集団の一員として自分を知り、他者を理解することで自分と相手、自分と集団との関係を尊重する態度が育てば、自らの役割を自覚し、社会性ある行動がとれると捉えることができる。今回、注目した「自己理解」「自主性」「協調性」は、社会を生きる人間に求められる基礎的な資質であると捉え分析の視点とした。



2 活動内容

チャレンジ&チェンジ!真夏のアドベンチャー2017 参加者 18名(小学生12名、中学生6名)

	午前	午後	夜
8月8日(火)		13:30~受付 14:00~出合いの集い・班活動	立山博物館より「立山の伝説について」※自然の家泊
8月9日(水)	滑川港へ移動(海上活動) 2班編成(荒天時10日と入替)	石田浜へ移動→徒歩で「黒部市ふれあい交流館」へ移動(荒天時10日と入替)	野外炊事 ※黒部市ふれあい交流館泊
8月10日(木)	仲間作り活動(9日荒天時と入替)	自転車合わせ・自転車練習(荒天時10日と入替)	班タイム ※黒部市ふれあい交流館泊
8月11日(金)	自転車行程:黒部市~魚津市~滑川市~上市町~立山町(昼食)~富山市~立山町(国立登山研修所)(約50km)		班タイム ※登山研修所泊
8月12日(土)	カルデラ砂防博物館見学	ロッククライミング体験	バックキング(登山準備) ※登山研修所泊
8月13日(日)	登山行程① 千寿ヶ原~美女平~弘法~弥陀ヶ原(約13km)		星空観察、班タイム ※六甲学院立山ヒュッテ泊
8月14日(月)	登山行程② 弥陀ヶ原~天狗平~室堂 室堂散策(約6km)		星空観察、班タイム ※室堂山荘泊
8月15日(火)	登山行程③ 室堂~一の越~雄山(ご来光を拝む)~大汝~富士の折立~大走り~雷鳥沢~室堂(約10km)	バスで自然の家へ ファイナルパーティー準備	ファイナルパーティー ※自然の家(本館)泊
8月16日(水)	活動のまとめ・発表会	別れの集い	解散 14:00

3 自立を促すための手立て

(1) 目的の明確化(可視化)

本事業の目的をより明確にするために、その目的を子供たちに提示する際、何に「チャレンジ」して、どのように「チェンジ」してほしいのかを分かり易く表現し提示(可視化)した。

事業の目的

富山県の雄大な自然に触れながら、海拔0m~3,000mまでを自力で踏破することにより達成感を味わわせるとともにチャレンジ精神を育む。また、グループ活動を通して、主体性、自立性、協調性を養うとともに、豊かで自立した人格形成の基礎を培う。

子供に提示した目標

- 限界に挑戦(チャレンジ)して、自分に自信をもとう(チェンジ)。
- 仲間と一緒に活動(チャレンジ)して、友情・協力を味わおう(チェンジ)。
- 自然の美しさや厳しさを体験(チャレンジ)して、感動しよう(チェンジ)。

また、個々の「チャレンジ」と「チェンジ」を強く意識できるようにするために「チャレ・チェンカード」(図1)を作成し、毎日、記入した。振り返り時にその日の「チェンジ」した自分と翌日の「チャレンジ」する自分を記述した。

(2) こまめな記入チェックと励ましの助言(指導と評価の一体化)の工夫

前述の目的に迫る子供たちの個々の取組や記述について、日々の振り返りの時間に、スタッフがその内容をチェックし、適宜、評価・指導を行った。子供たちは、自分では気付かない自分の変化や努力を必要とする点を指摘してもらうことで、次の目標(チャレンジ)を設定しやすくなり、明確な目的意識がもてるのではないかと考えた。

(3) 分析の視点の設定

子供たちの自立に関する変容を分析しやすくするため、分析の視点を設定した。分析の視点に関しては、平成23年の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」で提示された「自己理解・自己管理能力(自分自身の可能性を含めた肯定的な理解を基に主体的に行動する力)」と「人間関係形成・社会形成能力(多様な他者の考えや立場を理解し、協力・協働して社会に参画する力)」を本事業の目的に当てはめて独自に分類化した。また、それぞれの視点における変容を判断する材料として、変容に向かおうとする姿(チャレンジ)と実際に変容した姿(チェンジ)に分け、指標とした。

表1 変容を見るための分析の視点と変容を判断する指標の例

チャレンジ	チェンジ	分析の視点
自分の限界を理解しつつ、仲間のために可能な限りその限界に迫ろうとする	仲間と共に達成できた時の喜びや感動から、自分に自信をもてるようになる	自己理解 耐性
自分のことは自分でしたり、弱い者を助けたり、他の人の意見を取り入れたりと、集団に貢献しようとする	活動中に起こるさまざまな困難を克服すべく、相談したり協力したりして目的を達成しようとし、友情や協力の大切さを感じる	自主性 協調性 社会性
自然の美しさ、雄大さ、神秘さ、厳しさなどを自らすすんで感じようとする	さまざまな自然との触れ合いで感動したり驚いたりしたことを言葉にし、自然を敬う心を身に付けたり、自然に対する知的好奇心・探究心をもったりする	自然への関心

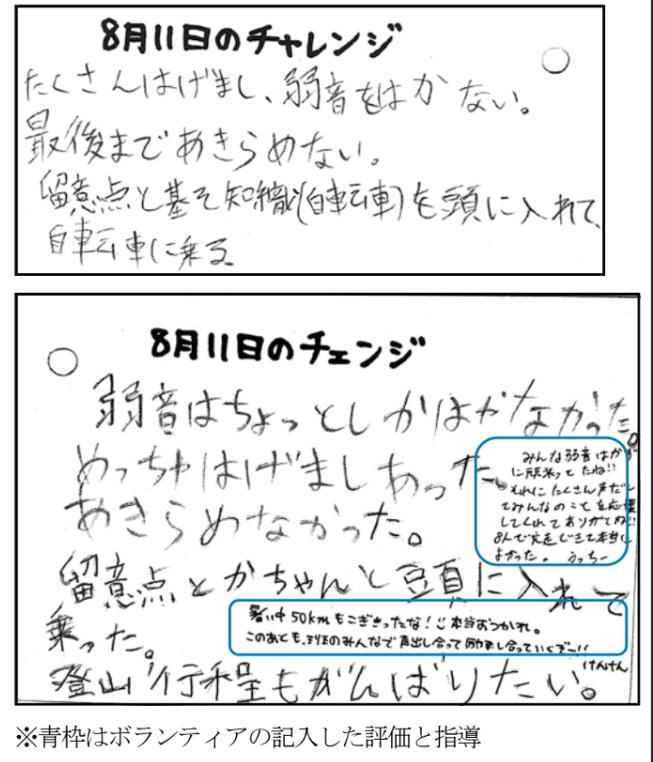
(4) 手立てを有効に機能させるための具体策

① 日々の個別面談

【「せきぼんタイム」(スタッフの記述チェックの時間)の設定】

何に「チャレンジ」して、どのように「チェンジ」してほしいのかを分かり易く表現した表をしおりに記載し、その表を用いて面談した。また、「チャレ・チェンカード」や「日々の振り返り」の記入内容をスタッフがチェックし、「チャレンジ」と「チェンジ」の内容を確認・アドバイスし、目的に近づいている部分ともう少し努力が必要な部分を本人に直接指摘した。

図1 子供が記入した「チャレ・チェンカード」



※青枠はボランティアの記入した評価と指導





②班旗の活用

事業の目的に班単位で近づくため、班旗を作成した。班旗に記載する内容が具体的な「チャレンジ」と「チェンジ」の内容を中心に記述するようアドバイスした。

③ボランティアの支援の在り方の工夫

「チャレ・チェンカード」や「振り返り」「健康調査」の記入内容をボランティアが毎日チェックし、活動の様子と合わせて毎日のスタッフミーティングで確認し合った。ボランティアは、子供たちの心身状態の把握に細心の注意を払い、気付いた点について、スタッフ間で共有して、指導・受容・共感の役割分担を設定して対応を行った。



4 評価と考察

(1) 抽出児童生徒の変容

新しいことに挑戦したり、新しい友だちをつくったりすることを苦手とするAさん

初日、小学校5年生のAさんはなかなか他の人に話しかけることができなかった。2日目、Aさんの振り返りで「まだ、班のみんなと仲良くなっていない」と記入してあった。翌日、班単位での「チャレ・チェンカード」の発表の時間に、Aさんは「もっと自分に話しかけてほしい」と発表した。早急な変化はなかった。そこで、スタッフで「自分から話しかけることも大切」とアドバイスしたところ、日を追うごとに積極的に話しかける姿が増えてきた。Aさんは今回の事業参加に向けて、「(つねに)一歩を踏み出せる自分になりたい」と目標を設定していた。本人が設定した目標をスタッフが復唱したり、実際にできた点を称賛したりすることで、自分に自信を持つようになっていき、最終日までには、ほぼ全員と気兼ねなく話せるようになっていた(自他理解が進んだ)。(表2)



この様に、子供の心の変化やつまづきをできるだけ早く把握し、適切なアドバイスを加えることは、9日間しかないキャンプではとても重要となる。また、本事業の様に子供たちにとって大きな負荷のかかる行程を含む場合、自分の消極性が、班の協力体制や団結の妨げになることを説明し、「早く班の役に立てるように」とアドバイスすることも重要である。子供の心に寄り添って適切なタイミングで適切なアドバイスをする事が「自主性」や「協調性」を育むには必要不可欠であり、そのためには、子供の心を把握できる材料(文章)や機会(意見交換や発表の場)を意図的に設定することが重要であると考察した。

表2 分析の視点におけるAさんの変容を示す記述

Aさんの「チャレンジ」に関わる記述	Aさんの「チェンジ」に関わる記述	分析の視点
最初、自分から知らない人に話すのは無理だと思ったが、このままキャンプを終えるのは嫌だと思い、自分から話しかけてみた。	話し易い友だちができた。その人とみんなを笑わせようとがんばっていたら、みんなと話せるようになった。	自他理解 耐性
登山の時、班員の仲間が話かけてくれて元気が出た。今度は自分が仲間へ声をかけてみようと思った。	登山の時、きつくて「ちょっと待って」と言った時、班の仲間がちゃんと待ってくれた。「真剣にやっていたら待ってくれるんだ」と思った。	自主性 協調性 社会性
きつい坂道でも弱音を吐かず絶対に登り切る。	苦勞してたどり着いた山頂の景色はとても美しかった。感動した。	自然への関心

(2) I K R 評価用紙の結果

本研究では、キャンプの1カ月前とキャンプ直後に「I K R 評価用紙(簡易版)」を用いた調査を行った。

表3 キャンプ前後の「I K R 評価用紙」の結果 +p<.10 *p<.05 **p<.01

I K R	人数	事前		事後		t 値
		平均値	S D	平均値	S D	
全体	18	62.7	24.4	142.2	15.6	9.25 **
心理的社会的能力	18	31.5	12.7	70.7	8.4	8.69 **
徳育的能力	18	16.9	7.3	41.9	4.3	10.49 **
身体的能力	18	14.2	5.5	29.6	3.9	7.41 **

その結果、3つの能力すべてと全体において1%の水準で有意な向上がみられた(表3)。従って、本事業の子供において、「生きる力」について変化があったと考えられる。その要因として、長期のキャンプであること、親元から離れて過ごすこと、希望者を集めた集団であることなどが考えられるが、今回の事業で重視したねらいの明確化や意図的なスタッフの助言などが子供の自立心を高めたとも考えられる。



(3) 本事業の目的(分析の視点)に対応したアンケートの結果

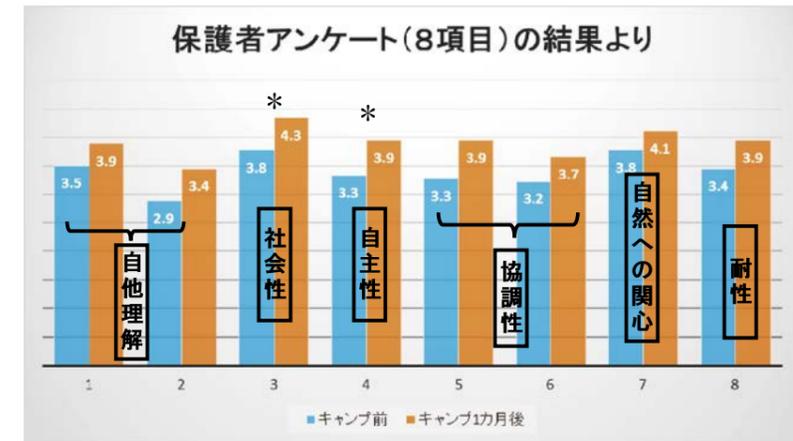
本研究では、事業の目的に子供たちが近づいたかどうかを見るため、前述の分析の視点に対応したアンケートを独自に作成した(表4)。このアンケートは、「とても良くあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階評定で求め、得点化し、参加した子供と保護者の両方を対象に、キャンプ1カ月前とキャンプ1カ月後の2回行い、t検定を用いて比較し分析した。

子供を対象にしたアンケートでは、各項目の平均値の比較で多少の上昇があったが、有意な上昇とはならなかった。対して保護者を対象にした同じ内容のアンケートは、社会性と自主性で5%の水準で有意な向上がみられた(図2)。このことは、本事業を通して「あいさつ」や「自分の意見を言う」など、社会や集団に働きかけて集団に貢献しようとする姿がみられるようになったと考えられる。

表4 本事業の目的に対応したアンケートの質問内容

項目	対象	質問内容
1 自他理解	子供	あなたは、家や学校、地域の活動で、自分が「役に立った」と思うことがある
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、「人の役に立った」と思われるようなことしていると思う
2	子供	自分のいいところや人より上手(じょうず)にできることを人に発表することができる
	保護者	お子さんは、自分のいいところや人より上手(じょうず)にできることを人に発表することができる
3 社会性	子供	だれにでも、あいさつができる
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、あいさつや返事を言うことができる
4 自主性	子供	家や学校、地域の活動で、人と相談したり1つのことを決めたりするとき、自分の意見を言うことができる
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、人と相談したり1つのことを決めたりするとき、自分の意見を言うことができる
5 協調性	子供	家や学校、地域の活動で、みんなの目的を達成させるためにみんなを励ましたり、率先して行動したりすることができる
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、みんなの目的を達成させるためにみんなを励ましたり、率先して行動したりすることができる
6	子供	家や学校、地域の活動で、「あぶない」や「こうした方が便利だ」と思うことがあったら、自分で工夫してなおすことができる
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、「あぶない」や「こうした方が便利だ」と思うことがあったら、自分で工夫してなおすことができる
7 自然への関心	子供	「自然ってすごいなあ」や「きれいだなあ」「ふしぎだなあ」と感じることもある
	保護者	お子さんは、「自然ってすごいなあ」や「きれいだなあ」「ふしぎだなあ」と感じることもある
8 耐性	子供	家や学校、地域の活動で、「不便(ふべん)だなあ」や「苦しいなあ」と感じる場面でも、前向きにがんばることができる
	保護者	お子さんは、家や学校、地域の活動で、「不便(ふべん)だなあ」や「苦しいなあ」と感じる場面でも、前向きにがんばることができる

図2 本事業の目的に対応した(分析の視点)アンケート結果(保護者向け) +p<.10 *p<.05 **p<.01



5 成果と課題



- 本事業の目的を、子供にとって親しみ易い表現に変えて明確に提示(可視化)したこと、また、「チャレ・チェンカード」(自分の目標とその結果を記入するカード)を毎日記録したことは、活動全般において子供たちが目的意識を強くもつという点で有効だったといえる。
- 今回、子供たちの記入した日々の振り返りや「チャレ・チェンカード」、班旗の記入内容をスタッフが定期的にチェックし、追記したり直接、言葉を投げかけたりした。そのことは、子供たちの事業に対する目的意識を強くさせ、心の変化やつまづきをできるだけ早くスタッフが把握するという点で有効であった。
- 今回用いた分析の視点は、スタッフが子供に対して支援・助言する際にある程度の指標となり、有効であった。しかし、子供の「目的に対応したアンケート」結果において、有意な向上が見られなかったことから、本活動の有効性(教育的効果)を分析する指標としては不十分であったといえる。今後は、より効果的に事業の目的を子供に提示する方法や子供に寄り添った指導を行う方法などを検討し、参加する子供たちのどのような側面を成長させることが長期キャンプとしてふさわしいのか精選する必要がある。

国立若狭湾青少年自然の家「わかさわん うみはともだち」

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●指導者自身が、「参加者」として海に思い切り入り、自然のすばらしさや楽しさ、また怖さなどを体験し、自然に対する「原体験」を得て、それを子どもたちに伝える。 ●幼児の体験では、仕掛けを組むのではなく、ありのままの自然の家の海や山を体験してもらうことが大切であると、波が打ち寄せる砂浜、大きな砂場など、ありのままを感じてもらおう活動にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ●福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織する。 ●小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児（年長児）対象の「わかさわん うみはともだち」を実施する。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果：○幼児に自然体験が不足している、その指導者が自然体験を引き出しとして持ち得ていないという現状を考慮して、「幼児に自然体験を」というシンプルな目標設定を行い、様々な事業を企画した。 ○5歳児（年長児）とのかかわりを生かして、「若狭湾！海フェスティバル」では5歳児からスノーケリングを実施した。また幼児期の運動プログラム普及事業では若狭町の2園の保育園と連携して自然の家でのプログラム展開を行った。 ○うみはともだちの事業は、海での体験に加え、秋に山での体験を計画していたが土砂崩れによる受入れ停止で実施できなかった。1～2月にかけて、職員が各園に訪問し、出前授業を行っている。今年度は保育園等の指導者と綿密な打ち合わせ・下見を行い、園の周辺の自然を生かした体験活動も取り入れた。若狭湾を身近に感じる機会を増やすことで、自然体験への関心を深めることができた。 ○幼児が書いた体験前の海の絵と体験後の絵の比較分析を今年度は専門家の意見も取り入れ、細かく行っている。まだ、結果は出ないが、幼児が海を身近に感じていることは確かなようなので、分析を進めていきたい。 ●課題：○次年度は、園付きの若狭湾の職員を固定して、園児の変容を調べていきたい。指導者研修の方は参加者が定員に達していないので、全日程参加にこだわらず、部分的な参加も可能にするなど弾力的運営を図っていきたい。 	

国立乗鞍青少年交流の家「自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー」

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●「講義や演習への参加」 【考える】事前に、子供たちと関わる上で必要な知識や理論を講義に位置付けること。 【仲間を知る】ボランティアの仲間と一緒に楽しむことができる野外活動を位置付けること。 ●「各学校の活動への参加」 【企画する】学校のプログラムに対応できるように企画・準備の時間を位置付けること。 【リーダー体験】子供たちを目の前にして主体的に活動できる場を位置付けること。 【振り返り】活動した後は、自分の姿を振り返る時間を位置付けること。 	<ul style="list-style-type: none"> ●担当する学校の先生との調整会議の位置付け方 ・子供たちと出会う前に、事前に学校の先生と打合せをおこなうこと。（学校側のねらいや子供の実態、または配慮すべきことを確認しておく。） ・就寝後、学校の先生方と1日の振り返りや翌日の課題の確認をすること。 ●担当専門職の位置付けや相談コーナー ・大学側から事前に資料をいただき、学年や男女などを考慮して各学校に学生を位置付けること。 ・いつでも相談できる専門職を各学校ごとに位置付け、困った時には支援に努めること。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果：○例年9月（1年生）、10月（4年生）の2回に分けていたセミナーを9月1回の実施にした。その結果、1年生の時にこのプログラムに参加した経験のある4年生が1年生を指導する結果となった。講師や施設職員とは違った視点で1年生を指導する役割が生まれたことで、4年生にとって新たな課題が生まれた。しかし、子供たちと後輩の両方を指導する困難さを克服することで、さらなる充実感を持ってプログラムを終えることができた。1年生にも緊張感が生まれ、目的意識を明確に持つことで4年生以上に成果が表れた。 ●課題：○大学のカリキュラムの関係で学生の参加が難しくなっており、大学側との連携強化が求められる。ボランティア募集の仕方をさらに検討していきたい。 ○ボランティアと学校との直接の打ち合わせの時間を生み出すことが難しくなっている。子供たちの実態を理解してボランティアが活動できるよう、施設職員による情報提供やボランティアへの指導を適切に行う必要がある。 	

国立妙高青少年自然の家「MYOKOチャレンジ2017」

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●次の3点を自立に結び付けるためポイントとして重視して、プログラムをデザインした。 ①自ら考え、判断するための基盤となる自己肯定感や自己理解 ②必要な助けを求め、仲間と助け合うことができる人間関係の形成 ③諦めずにやり抜く力につながるための達成感や成功体験、自信 	<ul style="list-style-type: none"> ●ステージごとに活動を変更せず、グループで「トレッキング（歩く）」「登山（歩く）」ことを主活動とした。 ●参加した子供たち全員が、安心して活動プログラムに向かい、お互いに成長し合える環境を作るため構造化を図った。 ●はじめから個人の症状や課題に焦点を当てて改善するのではなく、活動中に起こった出来事の中で、個人やグループの課題に対応しながら活動を支えるようにした。 ●グループの主体的な解決の過程を見守り手助けし、すぐ介入しないよう心掛けた。 ●グループの課題やステージのねらいに沿ったテーマをスタッフと与える「教育的な振り返り」と参加者が自由に出来事を話し合ったり、そのとき思ったことを伝え合ったりする「カウンセリング的な振り返り（日記含む）」を行った。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果：○キャンプ前よりもキャンプ実施後にリーダーシップの力が伸びた。 ○ステージごとに主活動を変更するのではなく、「歩く」という単純な活動を繰り返すことでも自立につながる教育的効果を得ることができた。 ○キャンプの構造化とスタッフの受容共感的なかわり方によって、子供たちが活動プログラムに取り組みやすくなり、個々やグループの主体性につながっていく。 ○起こった問題を「グループの力」で解決していくことが、参加者一人一人の成長を促すこと。その際、グループを支えるスタッフと子供との信頼関係が土台として重要であることが分かってきた。 ●課題：○どういったプログラム構成や手立てが、個々やグループの変容につながったのかをはかる客観的なデータを蓄積し、今後も検証していく必要がある。 ○データをもとに有効な手立てやプログラムデザインを整理し、妙高の手法として開発していく。 ○参加者にとって活動の負荷が大きかったり、集団に合わせる活動が多かったりすることが、必要以上のストレスになっていないか検証する。 ○キャンプ数年後の参加者にとってどのような効果があったのか、データを蓄積していく。 	

国立能登青少年交流の家「サマーキャンプ」

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●思いやりの心を育むために、同年代で関わるプログラムを充実させる。 ●自己肯定感を高めるために、達成感ももてるプログラムを充実させる。 ●自己の成長を自覚するために、参加者全員で振り返る活動を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●事業中は、参加者の様子を情報交換するとともに、毎日スタッフミーティングの時間を確保し、一日の振り返りや翌日のプログラムの運営やスタッフの関わり方等を検討した。 ●「思いやりの心を育むこと」「自己肯定感を高めること」に主眼を置き、ねらいに沿ったプログラムを設定した。特にサイクリングでは、事前踏査を行い、それぞれのコースに職員が付き、支援するようにした。 ●キャンプファイアでは、キャンプを振り返り、自分の言葉で語る時間を設定した。他者の思いをじっくりと聴くことを大切にすることで、仲間を思いやる気持ちを表出させるとともに、自分の頑張りを認めることで自己肯定感を高めることをねらった。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果：○友達と関わり合う過程（同年代の関わりに特化したプログラム）を充実させ、施設職員が適切な支援をしながら事業運営したことにより、子供同士が助け合ったり、励まし合ったりする姿が見られ、仲間を思いやる心が育まれたと考える。 ○参加者の実態に応じた困難なプログラムを体験する過程（サイクリングやカッター）を充実させたことにより、自分の頑張りを他者から認められる「自己有用感」をもつ場面が見られ、「自己肯定感」を高めることができたと考える。 ○施設職員との事前の打ち合わせを十分に行い、ねらいを明確にして取り組んだこと、事業中も参加者の様子を情報交換しながら進めたことにより、子供たちの自立を促す視点がぶれずに運営することができた。 ●課題：○本事業で「思いやりの心」を育む視点が、結果としてやや弱かった。思いやりの心を育むためのプログラムや評価の在り方など、さらに検討していく必要がある。 ○「思いやり尺度」「自己肯定感尺度」で設定した10項目が、本事業のプログラムでの参加者の変容を見取るのに適切であったか検討する必要がある。 ○本事業では、事業前と事業1か月後でアンケートを取ったが、より参加者の変容を詳しく調査するために、事業直後の参加者の意識を調査する必要がある。 	

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト

平成29年度 プログラム開発事業

「体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発」

国立立山青少年自然の家「チャレンジ&チェンジ!真夏のアドベンチャー2017」

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●事業の目的を明確化して子供に提示することによって、子供の活動に対する目的意識が高まる。 ●活動中に子供が記入するカードや振り返り、班旗は、ただ書かせるだけでなく、こまめにスタッフが記入内容をチェックし、子供にコメントを返すことによって、子供一人ひとりに対して適切な励ましの助言を随時行うことができる(指導と評価の一体化ができる)。 ●分析の視点を設定したことで、本事業を通して、子供のどのような側面を成長させることができたのかを見ることができ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「チャレ・チェンカード」をつくり、毎日のチャレンジとチェンジを子供たちに振り返らせた。 ●振り返り用紙や「チャレ・チェンカード」、班旗についてスタッフができるだけ目を通し、子供たちの成長を支援できるようにできるだけ個々に助言をした。 ●事前説明会で、主担当が保護者全員と個別面談を行い、参加する子供の特徴や意気込みなどを事前に把握した。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ●成果：○本事業の目的を、子供にとって親しみ易い表現に変えて明確に提示(可視化)したこと、また、「チャレ・チェンカード」(自分の目標とその結果を記入するカード)を毎日記録させたことは、活動全般において子供たちの目的意識を強くもたせるといって有効だった。 ○今回、子供たちの記入した日々の振り返りや「チャレ・チェンカード」、班旗の記入内容をスタッフが定期的にチェックし、追記したり直接、言葉を投げかけたりした。そのことは、子供たちの事業に対する目的意識を強くさせ、心の変化やつまずきをできるだけ早くスタッフが把握するという点で有効であった。 ○分析の視点は、スタッフが子供に対して支援・助言する際に指標となり、効果的であった。 ●課題：○分析の視点は、子供用アンケートにおいて、有意な向上が見られなかった。本活動の有効性(教育的効果)を分析する指標としては不十分であった。今後は、より効果的に事業の目的を子供に提示する方法や子供に寄り添った指導を行う方法などを検討し、子供たちのどのような側面を成長させることが長期キャンプとしてふさわしいのか精選する必要がある。 	

事業を終えて

私たち中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設は、青少年に質の高い体験活動の機会を提供し、自立した意欲あふれる青少年を育成することを願い、各施設が海型・山型の立地条件やそれぞれの特色を生かした事業に日々取り組んでいます。

本プログラム開発事業のテーマは、「体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発」として3年目の取組となります。また、プロジェクトが始まって10周年の節目を迎えました。プロジェクトを開始した当時は、各施設が対象としていた少年・青年の各年齢期の事業を5施設で共有することから始まり、それぞれの施設の強みを融合させながら調査研究・プログラム開発を進めてきました。

これまでに中部・北陸ブロックの本プロジェクトでまとめられてきた成果が、全国各地の実践に活用され、新たなプログラム開発、そして更なる体験活動が推進され、すべての青少年の自立の一助になることを心より願っております。

この先の10年を見据えて、体験活動を通じた青少年の自立を目指し、歩んでいきたいと思っています。

最後に、本プロジェクト開始当時から10年間の長きに渡り、継続的に親身にご指導を頂きました信州大学理事兼副学長 平野 吉直先生、筑波大学人間総合科学研究科教授 坂本 昭裕先生に心より感謝を申し上げます。

平成30年3月
独立行政法人国立青少年教育振興機構
中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局
国立立山青少年自然の家 次長 桑山 宗大

平成29年度プログラム開発事業 体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家

■発行日/平成30年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所

目的

課題を抱える青少年を対象とした自然体験活動や全ての青少年の自立を促進するための集団宿泊体験活動のプログラムを開発する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

得ようとする成果

<求める成果>

○課題を抱える青少年を対象とした体験活動プログラムや全ての青少年の自立を促進するためのプログラムの展開。

○量的・質的效果検証方法を活用して、子供たちの変容をとらえ、プログラムの有効性を検証する。

成果の普及・活用

本研究により開発したプログラムの実際や子どもの変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構中部・北陸ブロック5施設の教育事業並び研修支援事業に生かすとともに、全国の国立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる体験活動をとおして自立を促進するためのプログラム・手法などを具体的に示し、成果の普及と活用を図る。

研究機関

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家
国立若狭湾青少年自然の家・国立立山青少年自然の家
国立妙高青少年自然の家(事務局)

研究期間

平成29年4月1日～平成30年3月31日

本プログラム開発事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

全ての子供・若者が健やかに成長し、自立活躍できる社会を目指した子供・若者育成支援推進大綱(H28.2.9)では、「困難を有する子ども・若者やその家族を支援する」として「困難な状況ごとの取組」を整理し、推進すべき内容を示している。そこでは、様々な事情で、健やかな成長を遂げていく上での困難を抱えたり、不利な立場に置かれたりしている青少年の成長を社会全体で支えていくことを求めている。

国立青少年教育施設が、豊かな体験活動をとおして、課題を抱える青少年の成長を支援するとともに、全ての青少年の自立を促進するために開発したプログラムや事業を実施する際の関係機関との連携のあり方を広く普及することは、国の施策を具体化するナショナルセンターとしての大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

これまでに開発したプログラムを基に、子供に身につけてほしい力を確実に伸ばすことができるようなプログラムの運営や、関係機関との連携及び成果の普及など新たな展開を図る。

指導者

信州大学 理事・副学長 平野 吉直 先生
筑波大学 教授 坂本 昭裕 先生

担当者

国立能登青少年交流の家
次長 松本 猛
主任企画指導専門職 西 裕之
国立乗鞍青少年交流の家
次長 山川 忠彦
企画指導専門職 新津 尚治
国立立山青少年自然の家
次長 増田 共子
企画指導専門職 関原 和人
国立若狭湾青少年自然の家
次長 奥村 広一
企画指導専門職 大江 勝次
国立妙高青少年自然の家
次長 桑山 宗大
企画指導専門職 岩田 一紀

調査研究の計画

- (1) 第1回企画会議・研修会
(研究テーマ・研究計画の検討)
会場：国立妙高青少年自然の家 5月11日～12日
○プログラム開発事業の計画検討
○「子供の見取りと変容尺度について」
講師：筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生
- (2) 第2回企画会議・研修会(対象事業の報告)
会場：国立能登青少年交流の家 11月6日～7日
○各施設で実施した事業の概要と成果の報告
○事業成果のまとめ方についての検討
- (3) 第3回企画会議・研修会(報告書の検討)
会場：国立乗鞍青少年交流の家 12月11～12日
○各施設で開発したプログラムの成果と課題の確認
○報告書の推敲と校正
- (4) 第4回企画会議・研修会
(成果と課題の確認・次年度の計画)
会場：国立立山青少年自然の家 2月13日～14日
○平成30年度の事業企画及び全体計画の検討



国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜
TEL.0770-54-3100 <http://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭湾国定公園の中央にある田島半島の一角に位置する若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目の前に広がる専用ビーチを有し、ここでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL.0255-82-4321 <http://myoko.niye.go.jp/>

妙高戸隠連山国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13
TEL.0577-31-1011 <http://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳(3,026m)の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL.0767-22-3121 <http://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋(はくい)市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1
TEL.076-481-1321 <http://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

■中部・北陸ブロック

国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家・国立乗鞍青少年交流の家
国立能登青少年交流の家・国立立山青少年自然の家